

Oracle® Business Intelligence

インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (64-bit) on Intel Itanium

部品番号 : B25641-01

2006 年 10 月

Oracle Business Intelligence インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (64-bit) on Intel Itanium

部品番号 : B25641-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (64-Bit) on Intel Itanium

原本部品番号 : B25341-02

原本著者 : Divya Shankar

原本協力者 : Brintha Bennet, Garima Makin, Arun Kuzhimattathil, Janelle Simmons

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vi
表記規則	vi
JGoodies 社の使用許諾契約	vii
サポートおよびサービス	vii
1 インストールを開始する前の考慮事項	
1.1 Oracle Business Intelligence の概要	1-2
1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus	1-2
1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer	1-3
1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット	1-3
1.1.4 Reports Services	1-3
1.2 Oracle ホームの考慮事項	1-3
1.2.1 Oracle ホーム	1-4
1.2.2 複数の Oracle Business Intelligence のインストール	1-4
1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース	1-4
1.3 インストール前の作業	1-4
1.3.1 一般的なチェックリスト	1-5
1.3.2 ロケールの設定	1-5
1.3.3 インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用	1-5
1.3.4 コンポーネントに固有なインストール前の作業	1-5
1.3.4.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業	1-5
1.3.4.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業	1-5
1.3.4.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業	1-5
1.3.4.4 Reports Services のインストール前の作業	1-5
1.3.5 インストール時に必要な情報	1-6
1.4 インストーラの概要	1-6
1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ	1-6
1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ	1-6
1.4.2 インストーラによる前提条件チェック	1-7

2 Oracle Business Intelligence の要件

2.1	ハードウェア要件	2-2
2.1.1	最小ハードウェア要件	2-2
2.2	ソフトウェア要件	2-2
2.2.1	システム要件	2-3
2.3	データベース要件	2-3
2.3.1	最新の OLAP パッチのダウンロード	2-3
2.3.2	OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ	2-4
2.4	ブラウザ要件	2-4
2.5	その他のソフトウェア要件	2-5

3 Reports Services の詳細な要件

3.1	Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について	3-2
3.2	CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素	3-2
3.3	ハードウェア要件	3-2
3.3.1	同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件	3-3
3.3.2	メモリー使用量を減らすためのヒント	3-3
3.4	システム要件	3-3
3.5	Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows)	3-7
3.6	ポート	3-8
3.6.1	エフェメラル・ポートについて	3-8
3.6.2	ポートが使用中かどうかの確認	3-9
3.6.3	デフォルトのポート番号の使用	3-10
3.6.4	カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能)	3-10
3.6.4.1	staticports.ini ファイルのフォーマット	3-11
3.6.4.2	エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートに代わって 使用されるケース	3-12
3.6.4.3	Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート	3-13
3.7	オペレーティング・システム・ユーザー	3-14
3.8	環境変数	3-15
3.8.1	環境変数の設定	3-15
3.8.2	ORACLE_HOME および ORACLE_SID	3-15
3.8.3	PATH および CLASSPATH	3-15
3.8.4	TNS_ADMIN	3-15
3.8.5	TEMP	3-15
3.9	%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル	3-16
3.10	ネットワーク関連トピック	3-16
3.10.1	DHCP コンピュータへのインストール	3-16
3.10.2	マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール	3-17
3.10.3	複数の別名を持つコンピュータへのインストール	3-17
3.10.4	ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール	3-17
3.10.5	後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール	3-18
3.10.6	ループバック・アダプタのインストール	3-19
3.10.6.1	ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの チェック	3-19
3.10.6.2	ループバック・アダプタのインストール	3-19
3.10.6.3	ループバック・アダプタの削除	3-21

3.10.7	ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、 およびハード・ドライブからのインストール	3-21
3.10.8	リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール	3-22
3.10.9	NFS がマウントされたストレージへのインストール	3-24
3.10.10	1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行	3-24
3.10.11	NIS および NIS+ のサポート	3-24
3.11	インストーラによる前提条件チェック	3-24

4 Oracle Business Intelligence のインストール

4.1	Oracle Universal Installer の起動	4-2
4.1.1	Windows システム・ファイルのインストール	4-2
4.2	Oracle Business Intelligence のインストール	4-3
4.3	インストール後の作業	4-5
4.3.1	全般的なチェックリスト	4-6
4.3.1.1	更新	4-6
4.3.1.2	TNS 名	4-6
4.3.1.3	ポート番号	4-6
4.3.1.4	Oracle Application Server Infrastructure との関連付け	4-6
4.3.1.5	インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで障害支援技術と Java Access Bridge を使用する場合 (Windows のみ)	4-7
4.3.2	すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業	4-7
4.3.2.1	マルチディメンション分析の準備方法	4-7
4.3.2.1.1	Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の 準備方法	4-8
4.3.2.2	リレーショナル分析の準備方法	4-9
4.3.3	コンポーネントに固有なインストール後の作業	4-9
4.3.3.1	Discoverer のインストール後の作業	4-9
4.3.3.1.1	分析の準備	4-9
4.3.3.2	Discoverer Viewer のインストール後の作業	4-9
4.3.3.2.1	分析の準備	4-9
4.3.3.2.2	ワークブックの作成	4-9
4.3.3.2.3	SMTP 構成	4-9
4.3.3.3	Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール後の 作業	4-10
4.3.3.3.1	分析の準備	4-10
4.3.3.3.2	リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け	4-10
4.3.3.3.3	Discoverer Portlet Provider の登録	4-10
4.4	コンポーネントの起動	4-10
4.4.1	Discoverer Plus の起動	4-10
4.4.2	Discoverer Viewer の起動	4-11
4.4.3	Discoverer Portlet Provider の起動	4-11
4.5	サンプルの使用	4-11
4.6	ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス	4-12
4.6.1	インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール	4-12
4.6.2	インストール後に必要な追加のフォントをインストール	4-13
4.7	次の作業	4-14

5 Oracle Business Intelligence の削除と再インストール

5.1	Oracle Business Intelligence の削除	5-2
5.2	Oracle Business Intelligence の再インストール	5-3

A トラブルシューティング

A.1	始める前に	A-2
A.1.1	ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認	A-2
A.1.2	リリース・ノートの確認	A-2
A.2	インストールに関するトラブルシューティング	A-2
A.3	Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用	A-3

B Java Access Bridge のインストール

B.1	Java Access Bridge の概要	B-2
B.2	インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定	B-2
B.2.1	Java Access Bridge のインストール	B-2
B.2.2	Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成	B-3
B.2.2.1	Windows Server 2003 の場合の構成	B-3

C 非対話型インストールとサイレント・インストール

C.1	非対話型インストール	C-2
C.2	サイレント・インストール	C-2
C.3	インストール前	C-2
C.4	レスポンス・ファイルの作成	C-3
C.4.1	レスポンス・ファイルの例	C-3
C.5	インストールの開始	C-4
C.6	インストール後	C-4
C.7	サイレント・モードを使用した削除	C-5

D デフォルトのポート番号

D.1	デフォルトのポート番号を割り当てる方法	D-2
D.2	デフォルトのポート番号	D-2

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Application Server に付属しているスタンドアロン Oracle Business Intelligence CD-ROM から Oracle Business Intelligence のコンポーネントをインストールする方法について説明します。

対象読者

このマニュアルは、スタンドアロン Oracle Business Intelligence CD-ROM/DVD から Oracle Business Intelligence をインストールする担当ユーザーを対象としています。したがって、システム管理業務を問題なく遂行できるユーザーを想定しています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報（ホワイトペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメント、その他の関連ドキュメントなど）は、OTN-J（Oracle Technology Network Japan）から入手できます。URL は次のとおりです。

<http://www.oracle.com/technology>

表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。
<>	山カッコは、ユーザー指定の名前または値を囲みます。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。

JGoodies 社の使用許諾契約

Oracle Business Intelligence には、JGoodies 社のソフトウェアが組み込まれています。このソフトウェアの使用許諾契約は次のとおりです。

Copyright© 2003 JGoodies Karsten Lentzsch. All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

- Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.
- Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.
- Neither the name of JGoodies nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

インストールを開始する前の考慮事項

この章では、Oracle Business Intelligence とそのインストール前の作業について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [第 1.1 項「Oracle Business Intelligence の概要」](#)
- [第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」](#)
- [第 1.3 項「インストール前の作業」](#)
- [第 1.4 項「インストーラの概要」](#)

1.1 Oracle Business Intelligence の概要

Oracle Business Intelligence は、各種のコンポーネントで構成される、統合化されたビジネス・インテリジェンス・ソリューションです。この項では、次の Oracle Business Intelligence コンポーネントについて説明します。

- 第 1.1.1 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Plus」
- 第 1.1.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer」
- 第 1.1.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット」
- 第 1.1.4 項「Reports Services」

Oracle Business Intelligence のこれらのコンポーネントは、Oracle Application Server Control によって管理されます。

Oracle Business Intelligence のインストールには次のものが含まれます。

- Distributed Configuration Management
- Oracle Business Intelligence Discoverer
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- Oracle Application Server Control
- Oracle Application Server Reports Services
- Oracle Application Server Web Cache
- Oracle HTTP Server
- Oracle Process Manager and Notification Server

Oracle Developer Suite には、ビジネス・インテリジェンス・システムを管理および開発するための補助的な製品（総称して Oracle Business Intelligence Tools と呼ばれる）が付属しています。

1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus

Discoverer Plus は、Oracle のビジネス・ユーザーを対象とした Web ベースのレポート作成ツールです。このツールは、効率的で簡単に使用できるレポート作成ツールが必要なレポート作成者のために設計されました。

Discoverer Plus には、対話型で効率的なレポート・レイアウト機能やフォーマット機能が用意されており、付加価値分析を介してビジネスの実態を把握できます。1 回のマウス・クリックで、レポートに合計とパーセンテージを追加したり、傾向を早急に見きわめるためのデータ主導のストップライト・フォーマットを追加できます。また、Oracle データベースにすでに備えられている計算機能を利用して、高度な算術および統計分析を追加できます。Discoverer Plus では、これらの機能が組込み計算ウィザードを使用することで簡単に実行されます。

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational では、OLAP およびリレーショナル・データソースの両方に対して、同じように簡単に使用できるレポート作成環境をそれぞれ提供しています。

Discoverer Plus の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer

Discoverer Viewer は、ビジネス・ユーザーを考慮して特別に設計されています。簡単に使用できる単純な HTML ユーザー・インタフェースによって、ユーザーは標準的な Web ブラウザからレポートにアクセスできます。そのために他のソフトウェアをデスクトップ上にインストールする必要はありません。

Discoverer Viewer を使用すると、Discoverer Plus および Discoverer Desktop で作成したワークシートのデータを分析できます。(たとえば、アイテムを再配置することで) ワークシートをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

Discoverer Viewer の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット

Discoverer Portlet Provider によって、ユーザーは Discoverer の既存のレポートを OracleAS Portal に公開できるため、レポートおよび業績の指標を追跡するセキュアでパーソナライズされたダッシュボードを簡単に作成できます。

Discoverer Portlet Provider によって、Portal ユーザーは次の Discoverer ポートレットを公開できます。

- ワークシートのリスト・ポートレット
- ワークシート・ポートレット
- ゲージ・ポートレット

Portal ユーザーは、(たとえば、ストップライト・フォーマットを追加することで) 各自の Discoverer ポートレットをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

注意: Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストールの後で Discoverer システムを Oracle Application Server のメタデータ・リポジトリ (リリース 10.1.2) に関連付ける必要があります (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

1.1.4 Reports Services

Oracle Application Server Reports Services は、品質の高いエンタープライズ・レポートを作成および公開するための、使いやすく、スケーラブルで、管理しやすいソリューションです。Oracle Reports を使用すると、複数のソースから生成されたデータを様々な形式 (ペーパー・レイアウト、Web、データ交換形式など) で公開できます。これにより、データを柔軟に提示できます。

注意: Reports Services には、Report Builder は含まれません。

Reports Services の要件の詳細は、[第 3 章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

1.2 Oracle ホームの考慮事項

この項では、単一の Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存について説明し、単一のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする際のガイドラインを提供します。この項の内容は次のとおりです。

- [第 1.2.1 項「Oracle ホーム」](#)
- [第 1.2.2 項「複数の Oracle Business Intelligence のインストール」](#)
- [第 1.2.3 項「Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース」](#)

1.2.1 Oracle ホーム

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアをインストールする最上位ディレクトリです。Oracle Business Intelligence は、新しい Oracle ホームにインストールする必要があります。

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) では、同じ Oracle ホームを次の製品と共有できません。

- 以前のバージョンの Oracle Business Intelligence コンポーネントまたは Oracle Developer Suite
- Oracle データベース・インストール
- Oracle Application Server の Forms/Reports Services の 10g スタンドアロン・サーバー・インスタンス

1.2.2 複数の Oracle Business Intelligence のインストール

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) の複数のインスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、次のガイドラインが適用されます。このガイドラインは、すでに Oracle Application Server がインストールされているコンピュータに Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) をインストールする場合にも適用されます。

- すべてのインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。ディスク領域の要件を判断するには、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
- 後続のインスタンスを前のインスタンスとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース

Oracle Business Intelligence は、Oracle データベースと同じコンピュータにインストールできます（必須ではありません）。Oracle データベースがすでにインストールされている（または、インストール予定の）コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、次の点に注意してください。

- 両方のインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。該当する Oracle データベース・インストール・ガイドおよびこのマニュアルの[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照し、必要な合計ディスク領域を判断してください。
- Oracle データベースとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle Business Intelligence をインストールします。

注意: Oracle Business Intelligence と Oracle データベースは、Oracle ホームを共有できません。

1.3 インストール前の作業

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、Oracle Business Intelligence のリリース・ノートを確認してください。

Oracle Business Intelligence のインストール前の作業は、次のように分類されます。

- [第 1.3.1 項「全般的なチェックリスト」](#)
- [第 1.3.2 項「ロケールの設定」](#)
- [第 1.3.3 項「インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用」](#)
- [第 1.3.4 項「コンポーネントに固有なインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.5 項「インストール時に必要な情報」](#)

1.3.1 一般的なチェックリスト

コンピュータには、必ずローカル管理者グループのメンバーでログインしてください。

すべての Oracle サービスまたは Oracle プロセスを停止し、動作中の他のアプリケーションをすべて閉じます。

1.3.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語は、動作環境ロケールに基づいた Java Virtual Machine (JVM) ロケールの設定に基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前に動作環境のロケールを設定します。

表 1-1 には、インストーラでサポートされるロケール言語が示されています。

表 1-1 インストーラでサポートされるロケール言語

言語	ISO-639 言語コード
英語	en
フランス語	fr
日本語	ja
ドイツ語	de

1.3.3 インストール時の障害支援技術および Java Access Bridge の使用

スクリーン・リーダーなどの障害支援技術を使用して Java ベースのアプリケーションおよびアプレットで作業する場合は、Oracle Business Intelligence のインストールを開始する前に、access_setup.bat を実行して障害支援技術プログラムを再開します。詳細は、[第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

1.3.4 コンポーネントに固有なインストール前の作業

ここに記載されていないコンポーネントには、コンポーネントに固有のインストール前の作業はありません。

- [第 1.3.4.1 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4.4 項「Reports Services のインストール前の作業」](#)

1.3.4.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業

なし

1.3.4.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業

なし

1.3.4.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業

なし

1.3.4.4 Reports Services のインストール前の作業

なし

1.3.5 インストール時に必要な情報

インストール・プロセスを構成する画面では、手順のガイドが提供されます。動作環境および選択したインストール・オプションに従って、表 1-2 に記載されている情報が必要です。

表 1-2 インストール時に入力する情報

項目	例
Oracle ホームの名前	BIHome1
Oracle ホームのパス	C:\oracle\BIHome_1
インスタンス名	BI_admin
インスタンス・パスワード	admin1

1.4 インストーラの概要

Oracle Business Intelligence では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用してコンポーネントをインストールし、環境変数を構成します。インストーラは、インストール・プロセスの各手順のガイドを提供します。

インストーラでは、異なる動作環境ごとにインストール・オプションの選択が自動化され、環境変数や構成設定を新しく設定したり、事前定義済みの環境変数や構成設定を検出できます。また、既存の製品の削除にもインストーラを使用します。

1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ

インストーラは、次の表に記載されているディレクトリにファイルを書き込みます。

表 1-3 インストーラが使用するディレクトリの説明

ディレクトリ	要件
Oracle ホーム・ディレクトリ	Oracle Business Intelligence ファイルが格納されます。このディレクトリは、Oracle Business Intelligence をインストールするときに指定します。詳細は、第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」を参照してください。
インベントリ・ディレクトリ	このディレクトリは、コンピュータにインストールされている Oracle 製品を継続して記録するために使用されます。詳細は、第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」を参照してください。
一時ディレクトリ	一時ディレクトリは、インストール時にのみ必要なファイルが書き込まれます。システム環境変数 %TEMP% に指定されたディレクトリが、一時ディレクトリとして使用されます。

1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ

インベントリ・ディレクトリは、使用しているコンピュータでインストーラが初めて実行されるときに作成されます。インベントリ・ディレクトリには、他のインストール情報に加え、インストーラでインストールした製品の記録が保存されます。使用しているコンピュータに Oracle 製品がすでにインストールされている場合、インベントリ・ディレクトリはすでに存在しています。たとえば、Oracle インベントリは c:\Program Files\Oracle\Inventory にあります。

インベントリ・ディレクトリについては、次のことに注意してください。

- インベントリ・ディレクトリとその内容を、削除または変更しないでください。削除または変更すると、使用しているコンピュータにインストールした製品をインストーラが検出できなくなる場合があります。

- 使用しているコンピュータに初めて Oracle 製品をインストールすると、インストーラによってインベントリ・ディレクトリが C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory として自動的に作成されます。

Oracle をインストールするたびに、インベントリ・ディレクトリの /logs サブディレクトリにあるファイルにログが書き込まれます。ログ・ファイルには、次のフォーマットで名前が割り当てられます。

```
installActionsYYYY-MM-DD_time.log
```

1.4.2 インストーラによる前提条件チェック

インストーラは、インストールを開始する前に、使用しているコンピュータに対して前提条件を自動的にチェックします。次の表に、インストーラで実行される前提条件チェックを示します。

表 1-4 インストーラによる前提条件チェック

前提条件チェック	参照先
コンピュータで少なくとも 256 色を表示できることの確認	第 2.1 項「ハードウェア要件」
最小 CPU スピードの確認	第 2.1 項「ハードウェア要件」
オペレーティング・システム要件の確認	第 2.2 項「ソフトウェア要件」

Oracle Business Intelligence の要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが次の各項で説明している要件を満たしていることを確認してください。

- [第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)
- [第 2.2 項「ソフトウェア要件」](#)
- [第 2.3 項「データベース要件」](#)
- [第 2.4 項「ブラウザ要件」](#)
- [第 2.5 項「その他のソフトウェア要件」](#)

Reports Services のインストールの詳細は、[第 3 章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

2.1 ハードウェア要件

ハードウェア要件の最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

Oracle Business Intelligence には、次の最小ハードウェア要件があります。

2.1.1 最小ハードウェア要件

中間層をホスティングするマシンでの Windows の Oracle Business Intelligence には、次のハードウェア要件があります。

表 2-1 最小ハードウェア要件

ハードウェア項目	最小要件
CPU	900MHz Intel Itanium プロセッサ (推奨: 500MHz)
メモリー	512MB
ディスク領域	880MB
TEMP ディレクトリ領域	256MB
仮想メモリー	1535MB
モニター	256 色表示

クライアント・マシンで Discoverer Plus を実行するユーザーには、次の要件があります。

- Oracle Jar キャッシュのユーザー個人プロファイル領域として、最低 30MB が必要です。
- Java Virtual Machine をインストールする場合は、次の要件が追加されます。
 - クライアント・マシンに対する管理権限
 - 最低 25 ~ 50MB の使用可能ディスク領域

ハードウェア要件の最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

2.2 ソフトウェア要件

Oracle Business Intelligence は、次のコンピュータにインストールできます。

- ネットワーク上にないコンピュータ。この場合は、静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスを使用して、コンピュータを構成する必要があります。コンピュータのホスト名が静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスに変換されるように、コンピュータを構成します。
- 動的ホスト構成プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol: DHCP) ネットワーク上のコンピュータ。この場合は、ループバック構成を使用する必要があります。コンピュータのホスト名がループバック IP アドレスに変換されるように、コンピュータを構成します。

注意： ネットワーク上にないコンピュータまたは DHCP ネットワーク上にないコンピュータにインストールした場合は、そのコンピュータからのみ Discoverer を使用できます。つまり、他のマシンからは Discoverer に接続できません。

関連項目：

- オペレーティング・システム要件の詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。
- オペレーティング・システム要件の最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

2.2.1 システム要件

中間層をホスティングするコンピュータでの Oracle Business Intelligence には、オペレーティング・システムとして、Microsoft Windows 2003 (64 ビット) の Service Pack 1 以上が必要です。

クライアント・コンピュータでの Oracle Business Intelligence には、次のオペレーティング・システム要件があります。

表 2-2 クライアント・コンピュータでのオペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	追加要件
Microsoft Windows 2000	Service Pack 4 以上
Microsoft Windows XP Professional Edition	なし
Microsoft Windows 2003 (64 ビット)	Service Pack 1 以上

オペレーティング・システム要件の最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

2.3 データベース要件

Oracle Business Intelligence 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のデータベース・バージョンでサポートされています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.6 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.4 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上)、動作保証対象となる予定

サポートされているバージョンの最新情報は、<http://metalink.oracle.com> のアプリケーションの動作保証に関する項で確認できます。

2.3.1 最新の OLAP パッチのダウンロード

マルチディメンション・データソースをクエリーするときは、特定のデータベース・リリースとパッチのみがサポートされます。最新の OLAP パッチにアクセスする手順は次のとおりです。

1. Oracle Metalink (<http://metalink.oracle.com>) にログインします。
2. 「Patches」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。

4. 「Advanced Search」画面で、各フィールドを次のように入力します。
 - **Product or Product Family:** 「Search」アイコンをクリックして、「Search In」フィールドで「Database & Tools」を選択します。「View All」をクリックします。表示されるリストから、「Oracle OLAP」をクリックします。
 - **Release:** ドロップダウン・リストから適切なリリース番号を選択します。
 - **Patch Type:** 「Any」を選択します。
 - **Platform or Language:** サイト用のプラットフォームを選択します。
 - 残りのフィールドは空白のままにします。

「Go」をクリックするとパッチのリストが表示されます。パッチ名に OLAP が付いているのが OLAP パッチです。

2.3.2 OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ

Oracle データベースを最近アップグレードした場合は、OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE 初期化パラメータが、以前のリリースのオプティマイザの動作を維持する値に設定されている場合があります。

OracleBI Discoverer Plus OLAP では、最適なパフォーマンスを得るために、最新のデータベース機能を利用しています。OracleBI Discoverer Plus OLAP では、OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータを、それぞれのデータベース・リリースのデフォルト値のままにする必要があります（デフォルト値は、9.2.0 など、データベースのリリース番号）。設定を変更すると、予期しない動作を引き起こす場合があります。

OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータを明示的に以前のリリースに設定しないでください。実行計画やクエリーのパフォーマンスの問題は、ケース・バイ・ケースで対応してください。

2.4 ブラウザ要件

クライアント・コンピュータでの Oracle Business Intelligence には、次のブラウザ要件があります。

表 2-3 クライアント・コンピュータでのブラウザ要件

項目	要件
Microsoft Internet Explorer	5.5、6.0 およびそれ以上
Netscape	7.1、7.2
Mozilla	1.5 以上

注意： ポップアップ・ブロッカーを使用すると、Discoverer Plus が起動しない場合があります。

サポートされるブラウザの最新情報は、Oracle *MetaLink* サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

2.5 その他のソフトウェア要件

Oracle Business Intelligence には、前述されている以外にも次のソフトウェア要件があります。

表 2-4 その他のソフトウェア要件

項目	要件
Discoverer Viewer	クライアント・マシンで Discoverer Viewer を実行するには、ブラウザで JavaScript および Cookie が有効になっている必要があります。
Microsoft Excel	Discoverer Plus Relational を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 97（またはそれ以上）が必要です。ワークシートを Microsoft Excel の Web クエリー・フォーマットにエクスポートする場合は、Excel 2000（またはそれ以上）が必要です。 Discoverer Plus OLAP を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 2000（またはそれ以上）が必要です。
JRE	Discoverer Plus を実行するには、次の JRE のいずれか 1 つを使用する必要があります。 <ul style="list-style-type: none">■ Sun Java Plug-in 1.4.2_06（推奨）■ Oracle JInitiator 1.3.1.22

Reports Services の詳細な要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが、この章で説明する Reports Services の要件を満たしていることを確認してください。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 3.1 項 「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」
- 第 3.2 項 「CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素」
- 第 3.3 項 「ハードウェア要件」
- 第 3.4 項 「システム要件」
- 第 3.5 項 「Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows)」
- 第 3.6 項 「ポート」
- 第 3.7 項 「オペレーティング・システム・ユーザー」
- 第 3.8 項 「環境変数」
- 第 3.9 項 「%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル」
- 第 3.10 項 「ネットワーク関連トピック」
- 第 3.11 項 「インストーラによる前提条件チェック」

3.1 Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について

インストール中に、「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。Oracle Business Intelligence で使用される送信メール (SMTP) サーバーを入力します。

例: smtp.oracle.com

注意: このフィールドはオプションです。ただし、メール・サーバー情報を構成していないと、レポートを電子メールで配信できません。送信メール・サーバー情報の指定方法の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

3.2 CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素

Oracle Reports 10g リリース 2 (10.1.2) では、サーバー構成ファイルに ORBPorts という要素が導入されました。これによって、CORBA を介した通信で Reports Server とエンジンが使用するポート番号を明示的に指定できます。ポートは、範囲で指定することも、カンマで区切って個別に指定することもできます。次に例を示します。

```
<ORBPorts value="15000-15010"/> (値の範囲)
```

```
<ORBPorts value="15000,16000,17000,18000"/> (カンマで区切られた値)
```

デフォルトでは、サーバー構成ファイルに ORBPorts 要素が存在しません。この要素がない場合は、Reports Server によって CORBA 通信用のポートがランダムに選択されます。ORBPorts 要素の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「OracleAS Reports Services の構成」を参照してください。

注意: ORBPorts 要素は、Reports Server を実行しているサーバーで管理者が TCP ポートのフィルタリングを有効にしている場合にのみ定義する必要があります。ポートのフィルタリングが有効である場合、管理者は Reports Server 用にいくつかのポートを開き、ORBPorts を使用してそれらのポートを Reports Server とエンジンの通信用としてサーバー構成ファイルに指定できます。いずれのポートも使用できない場合は、Reports Server またはエンジンの起動が失敗し、エラーが表示される可能性があります。

3.3 ハードウェア要件

この項では、Oracle Business Intelligence を実行するためのシステム要件を示します。次にあげる要件の多くはインストール・プロセスの開始時にインストーラでチェックされ、満たされていない場合は警告が表示されます。時間を節約するために、インストーラでチェックされない要件のみを手動でチェックすることができます。インストーラでチェックされない要件については、次の表で確認してください。

インストーラによるシステム・チェックは、インストールを行わなくても実行できます。これには、runInstaller コマンドを実行します。runInstaller コマンドは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM (Disk 1) または DVD-ROM の application_server ディレクトリにあります。

結果はログ・ファイルに書き込まれるとともに、画面に表示されます。

実行されるチェックの種類の詳細は、[第 3.11 項「インストーラによる前提条件チェック」](#)を参照してください。

表 3-1 ハードウェア要件

項目	要件
プロセッサ・タイプ	Intel Itanium 2
プロセッサ・スピード	900MHz

表 3-1 ハードウェア要件 (続き)

項目	要件
ネットワーク	有効
IP	DHCP、静的
ディスク領域	880MB
スワップ領域	1GB
TMP 領域	256MB
モニター	SVGA

3.3.1 同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件

OracleAS Infrastructure 10g と中間層を同じコンピュータで実行する場合は、そのコンピュータが第 3.3 項に示すメモリー要件を満たしていることを確認します。

表に示されている値は、少人数のユーザー環境でテストされたものです。ユーザー数が多い場合は、さらに多くのメモリーが必要となる場合があります。

3.3.2 メモリー使用量を減らすためのヒント

メモリー消費量を減らす必要がある場合は、次の方法をお勧めします。

- 必要なコンポーネントのみを構成します。
- 必要なコンポーネントが含まれる最小の中間層タイプを選択します。
- インストールが終了したら、必要なコンポーネントのみを起動します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- Application Server Control は、インスタンスの管理が必要な場合のみ実行します。ほとんどの場合、Application Server Control を常時実行する必要はありません。

1 台のコンピュータで複数の Oracle Business Intelligence インスタンスを実行する場合は、個々の Application Server Control がメモリーを大量に消費する可能性があります。Application Server Control を必要なときにのみ実行すれば、他のコンポーネントにメモリーを解放できます。

3.4 システム要件

表 3-2 に、Reports Services をインストールするためのシステム要件を示します。次にあげる要件の多くはインストールの開始時にインストーラでチェックされ、満たされていない場合は警告が表示されます。インストーラでチェックされない要件については、表 3-2 で確認してください。

インストーラによるシステム・チェックは、`setup.exe` コマンドで実行することもできます。`setup.exe` コマンドは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM (Disk 1) または DVD の `orawinfrs` ディレクトリにあります。

CD-ROM (E: が CD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> setup.exe -executeSysPrereqs
```

DVD (E: が DVD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> cd orawinfrs
E:¥orawinfrs> setup.exe -executeSysPrereqs
```

結果はログ・ファイルに書き込まれるとともに、画面に表示されます。実行されるチェックの種類の詳細は、第 3.11 項「インストーラによる前提条件チェック」を参照してください。

表 3-2 システム要件

項目	要件
オペレーティング・システム	Microsoft Windows 2003 (64 ビット) の Service Pack 1 以上 インストーラによるチェック: あり
64 ビットに対する動作保証	32 ビット・バージョンの Oracle Application Server for Windows は、Intel x86、AMD64、Intel EM64T の各プロセッサで動作します。詳細は、Oracle MetaLink (http://metalink.oracle.com) にアクセスしてください。 サポートされている 64 ビットのオペレーティング・システムは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows XP Professional x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Standard x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Enterprise x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Datacenter x64 Edition 注意: Oracle AS Infrastructure 10g 以外の製品とコンポーネントはすべて、AMD64 および Intel EM64T プロセッサでの動作が確認されています。
ネットワーク	Oracle Business Intelligence は、ネットワークに接続されているコンピュータにも、ネットワークに接続されていないスタンドアロン・コンピュータにもインストールできます。 スタンドアロン・コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続できます。ネットワークに接続する際に、いくつかの構成作業を実行する必要があります。 インストーラによるチェック: なし
IP	Oracle Business Intelligence は、静的 IP または DHCP ベースの IP を使用したコンピュータにインストールできます。 注意: <ul style="list-style-type: none"> ■ DHCP コンピュータにインストールする場合の要件の詳細は、第 3.10.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」を参照してください。 ■ 静的 IP コンピュータにインストールし、ネットワークと接続した状態または切断した状態で Oracle Business Intelligence を実行できるようにする場合の要件の詳細は、第 3.10.5 項「後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール」を参照してください。 インストーラによるチェック: なし
ホスト名	ホスト名が、255 文字以内であることを確認してください。
プロセッサ・スピード	Intel Itanium 2 (900MHz 以上) インストーラによるチェック: なし

表 3-2 システム要件 (続き)

項目	要件
メモリー	<p>OracleAS Infrastructure:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management: 3.7GB ■ Oracle Identity Management のみ : 1.25GB ■ OracleAS Metadata Repository のみ : 3.7GB <p>Oracle Application Server 中間層 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2EE and Web Cache: 846MB ■ Portal and Wireless: 1.2GB ■ Business Intelligence and Forms: 1.7GB <p>OracleAS Developer Kits: 256MB</p> <p>注意:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インストーラによって、コンピュータのメモリー容量がチェックされ、コンピュータが最小メモリー要件を満たしていない場合は警告が表示されます。 ■ これらの値は、コンピュータごとに 1 つの Oracle Application Server インスタンスのみを実行している場合を想定しています。同一のコンピュータで複数のインスタンスを実行する場合は、第 3.3.1 項「同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件」を参照してください。 ■ これらは、Oracle Application Server をインストールし、実行するための最小値です。一般的な本番サイトでは 512MB 以上の物理メモリーが必要です。通信量の多いサイトでは、メモリーをさらに増やすことによってパフォーマンスを向上させることができます。Java アプリケーションでは、OC4J プロセスに割り当てられる最大ヒープ・サイズを増やすか、別の OC4J プロセスがこのメモリーを利用するように構成する必要があります。 ■ インストールに最適なメモリー量を決める最善の方法は、使用しているサイトの負荷テストを行うことです。アプリケーションや利用パターンによって、リソースの要件は大幅に異なることがあります。また、メモリーを監視するオペレーティング・システムのユーティリティでは、(共有メモリーを示すなどの理由で) メモリー使用を実際より多く報告するものもあります。メモリー要件を決定するには、負荷テストの際に、物理メモリーの追加によるパフォーマンスの向上を監視することをお勧めします。メモリーおよびプロセッサ・リソースをテスト用に構成する方法は、各プラットフォーム・ベンダーのドキュメントを参照してください。 <p>インストーラによるチェック : あり</p>
ファイル・システムのタイプ	<p>ファイル・システムのタイプには、FAT32 や FAT よりも NTFS をお勧めします。NTFS には、ファイルへの権限を制限するセキュリティ機能などが含まれているためです。</p> <p>インストーラによるチェック : なし</p>
ディスク領域	<p>OracleAS Infrastructure:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management: 3.07GB <p>OracleAS Metadata Repository データベースのデータファイルは、OracleAS Infrastructure のインストール先ディスクとは異なるディスクにインストールできます。その場合は、データファイルのインストール先ディスクに 1.85GB 以上の空き領域があることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Identity Management のみ : 1.25GB ■ OracleAS Metadata Repository のみ : 3.7GB <p>Oracle Application Server 中間層 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2EE and Web Cache: 846MB ■ Portal and Wireless: 1.2GB ■ Business Intelligence and Forms: 1.7GB <p>OracleAS Developer Kits: 256MB</p> <p>インストーラによるチェック : なし</p>

表 3-2 システム要件 (続き)

項目	要件
TEMP ディレクトリ領域	<p>インストーラを実行するには 55MB が必要ですが、特定のインストール・タイプをインストールするには 256MB が必要です。</p> <p>TEMP ディレクトリに十分な空き領域がない場合は、環境変数 TMP を設定することで別のディレクトリを指定できます。詳細は、第 3.8.5 項「TEMP」を参照してください。</p> <p>インストーラによるチェック：あり</p>
ページファイルの合計サイズ (仮想メモリー)	<p>これらは見積値です。コンピュータのメモリー量に基づいて、Windows で推奨されている値を使用する必要があります。</p> <p>OracleAS Infrastructure:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management: 1GB ■ Oracle Identity Management のみ : 1GB ■ OracleAS Metadata Repository のみ : 1GB <p>Oracle Application Server 中間層:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2EE and Web Cache: 512MB ■ Portal and Wireless: 512MB ■ Business Intelligence and Forms: 1GB <p>OracleAS Developer Kits: 512MB</p> <p>OracleAS Personalization を使用する場合は、コンピュータの物理メモリー量の 1.5 倍以上のサイズを持つページファイルを使用する必要があります。</p> <p>OracleAS クラスタを使用する場合は、1GB 以上をお勧めします。</p> <p>本番環境では、1GB 以上をお勧めします。</p> <p>ページファイル (仮想メモリー) の合計サイズを表示し、変更する手順は次のとおりです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コントロール・パネルの「システム」を表示します。 これを行うには、「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 2. 「詳細設定」タブを選択します。 3. 「パフォーマンス」セクションの「設定」をクリックします。 4. 「詳細設定」タブを選択します。 5. 「変更」をクリックし、仮想メモリーの設定を表示して変更します。 <p>インストーラによるチェック：あり</p>
モニター	<p>256 色表示</p> <p>インストーラによるチェック：あり</p>
サポートされるブラウザ	<p>Oracle Enterprise Manager 10g がサポートされているブラウザは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 (Microsoft Windows の場合のみ) ■ Netscape 7.2 ■ Mozilla 1.7。Mozilla は http://www.mozilla.org からダウンロードできます。 ■ Firefox 1.0.4。Firefox は http://www.mozilla.org からダウンロードできます。 ■ Safari 1.2 (Apple Macintosh コンピュータ) <p>サポートされるブラウザの最新情報は、Oracle <i>MetaLink</i> サイト (http://metalink.oracle.com) を確認してください。</p> <p>インストーラによるチェック：なし。ただし、サポートされていないブラウザを使用して Oracle Enterprise Manager 10g にアクセスした場合は、警告メッセージが表示されます。</p>

3.5 Windows システム・ファイル (wsf.exe) (Microsoft Windows)

注意: 次に示す手順は、インストーラから要求された場合にのみ実行します。

Oracle Business Intelligence には、Windows システム・ディレクトリ (通常は C:\Windows\system32 または C:\Winnt\system32) の一部のシステム・ファイルに最低限必要なバージョンが存在します。Oracle Business Intelligence のインストーラを実行すると、インストーラによってコンピュータ上の Windows システム・ファイルがチェックされます。これらのファイルの古いバージョンが見つかり、それらを他のプロセスが使用している場合は、インストーラを終了し、wsf.exe を実行して最新の Windows システム・ファイルをインストールするように要求されます (ファイルの古いバージョンが見つかって、それらを他のプロセスが使用していない場合は、それらが自動的に置換されるので、wsf.exe を実行する必要はありません)。

wsf.exe はインストーラと同じディレクトリにあります。

wsf.exe を実行するには (インストーラから要求された場合のみ)、次の手順に従います。

1. wsf.exe を起動します。これにより、Oracle Universal Installer が起動されて Windows システム・ファイルがインストールされます。

CD-ROM (E: が CD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> wsf.exe
```

DVD-ROM (E: が DVD-ROM ドライブである場合) :

```
E:¥> cd application_server
```

```
E:¥> wsf.exe
```

2. インストーラの画面の指示に従います。

表 3-3 Windows システム・ファイルをインストールするための画面

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. ファイルの場所の指定	インストール先名 : wsf の Oracle ホームの名前を入力します。 インストール先パス : 任意のフルパスを入力します。このフィールドに入力した値に関係なく、適切なシステム・ディレクトリにファイルがインストールされます。 「次へ」をクリックします。
3. 警告 : システムを再起動してください	この画面が表示された場合は、インストール終了時にコンピュータが自動的に再起動されて、Windows システム・ファイルのインストールが完了します。コンピュータで実行中のアプリケーション (このインストーラ以外) を保存し、終了してください。 「次へ」をクリックします。
4. サマリー	「次へ」をクリックして、Windows システム・ファイルのインストールを開始します。
5. インストールの終了	「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

3. インストール時に「警告 : システムを再起動してください」という画面が表示されると、インストーラによってコンピュータが再起動されます。表示されない場合は、続行する前にコンピュータを再起動します。

3.6 ポート

Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g などの多くの Oracle Business Intelligence コンポーネントには、ポートが使用されます。インストーラでデフォルトのポート番号を自動的に割り当てるか、または各自で指定したポート番号を使用します。

- 第 3.6.1 項「エフェメラル・ポートについて」
- 第 3.6.2 項「ポートが使用中かどうかの確認」
- 第 3.6.3 項「デフォルトのポート番号の使用」
- 第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」

3.6.1 エフェメラル・ポートについて

問題：エフェメラル・ポートとの競合が原因でコンポーネントを起動できない

必要なポートを使用できないために、Oracle Application Server のプロセスを起動できないことがまれにあります。この場合、プロセスの起動が失敗するか、またはポートにバインドできないことがプロセスから通知されます。影響を受けたプロセスを後から再起動すると正常に起動されるので、この動作は一時的である可能性があります。

この問題は、エフェメラル・ポートの範囲内にあるポート番号を、Oracle Application Server がデフォルトで使用することが原因です。通常、エフェメラル・ポートは、クライアント / サーバー TCP/IP 接続のクライアント側で使用されます。一般に、クライアント・プロセスは接続のクライアント側で使用されるポートの値を関知しないため、どの TCP/IP 実装でも、クライアント側で使用されるポート値をオペレーティング・システムが選択できるようになっています。オペレーティング・システムは、このタイプのクライアント接続ごとに、エフェメラル・ポートの範囲からポートを選択します。

一方、サーバー・プロセス（Oracle Application Server プロセスなど）は、エフェメラル・ポートを使用できません。これらのプロセスでは、固定ポート値を使用して、クライアントが常に同じサーバー・ポートに接続してサーバーと通信できるようにする必要があります。

エフェメラル・ポートとのポートの競合は、Oracle Application Server プロセスがエフェメラル・ポートの範囲内にあるポートを使用するように構成されていると発生します。Oracle Application Server プロセスは、起動時に、必要なポートをすでにクライアント・プロセスが使用していることを検知します（クライアントはオペレーティング・システムからエフェメラル・ポートの割当てを受けています）。このクライアントには、TCP/IP 経由で通信可能なコンピュータ上のあらゆるプロセスが該当します。Oracle Application Server プロセスに必要なポートが使用できない場合、そのプロセスの起動は失敗します。

この問題は、オペレーティング・システムの中でも Microsoft Windows で比較的良好に発生します。これは、Windows がデフォルトで小さな範囲のポートをエフェメラル・クライアント接続に使用するためです。

エフェメラル・ポートの範囲

Microsoft Windows でのエフェメラル・ポートの範囲は、ポート 1024 から 5000 までです（両ポートを含む）。

Windows で調整できるのは、この範囲の上限だけです。それ以外のほとんどのオペレーティング・システムでは、デフォルトのエフェメラル・ポートの範囲がこれよりはるかに大きく、範囲の下限も上限も調整可能です。

一部の Application Server プロセス（Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control、および OC4J を含む）は、エフェメラル・ポート範囲内のポートを使用します。必要なポートがクライアントによって使用されていると、これらのプロセスは起動できません。

エフェメラル・ポートとの競合の回避

エフェメラル・ポートとの競合を回避するには、次のオプションがあります。

- `staticports.ini` を使用して Oracle Business Intelligence をインストールすることで、Oracle Business Intelligence のコンポーネントがエフェメラル・ポート範囲内のポートを使用しないようにします。`staticports.ini` ファイルで、1024 未満または 5000 を超えるポート番号を使用します。

詳細は、第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」を参照してください。

- Oracle Business Intelligence をすでにインストールしている場合は、1024 未満または 5000 を超えるポートを使用するようにコンポーネントを再構成できます。Oracle Application Server プロセスが現在使用するポートを変更する方法については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- （このオプションはインストール後でも実行できます。）コンピュータ上のエフェメラル・ポート範囲を変更します。このオプションは、前述のいずれのオプションも使用できない場合にのみ使用してください。このオプションでは、Windows レジストリが変更され、コンピュータ上で稼働するすべての製品に影響を与えるため、できるかぎり使用しないことをお勧めします。

このオプションでは、エフェメラル・ポート範囲の位置を変更します。変更する前に、コンピュータで使用している（Oracle または非 Oracle）製品が、エフェメラル・ポート範囲内の非エフェメラル・ポートを使用していないことを確認する必要があります。使用している製品がある場合は、それらのポート番号の位置を、新しい ReservedPorts 範囲（後述）、新しいエフェメラル範囲よりも上、またはポート 1024 よりも下に変更する必要があります。

このオプションを実装する手順は次のとおりです。

- エフェメラル・ポート範囲の上限を上げて範囲を拡大します。

レジストリの `MaxUserPort` 値を 13000 以上 65534 以下に設定します。`MaxUserPort` はエフェメラル・ポート範囲の上限です。

手順については、Microsoft サポート技術情報の文書番号 196271 (<http://support.microsoft.com/kb/196271/en-us>) を参照してください。

- 新たに拡大したエフェメラル・ポート範囲の一部を、Oracle Application Server 用に予約します。

ポート 1024 から 8000 までが Oracle Application Server 用として予約されるように、レジストリの `ReservedPorts` 値を設定します。予約範囲には、Oracle Application Server が通常使用するポートの範囲が組み込まれます。

手順については、Microsoft サポート技術情報の文書番号 812873 (<http://support.microsoft.com/kb/812873/en-us>) を参照してください。

- 変更を有効にするためにコンピュータを再起動します。

手順を実行すると、最終的に 1024 から 8000 までのポートが Oracle Application Server 用として予約され、8001 から 13000 までのポートが新しいエフェメラル・ポート範囲になります（`MaxUserPort` を 13000 に設定した場合）。予約範囲には Oracle Application Server が通常使用するポートの範囲が組み込まれ、エフェメラル・ポート範囲の大きさは当初の範囲と同じになります。

3.6.2 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用中かどうかを確認するには、次のように `netstat` コマンドを実行します。

```
C:\> netstat -an | find "portnum"
```

ポート番号は二重引用符で囲む必要があります。

3.6.3 デフォルトのポート番号の使用

コンポーネントにデフォルトのポート番号を使用する場合は、何もする必要はありません。デフォルトのポート番号とポート範囲のリストは、付録 D「デフォルトのポート番号」を参照してください。各コンポーネントのポート範囲で、少なくとも 1 つのポートが使用できることを確認してください。インストーラが範囲内で空いているポートを見つけられないと、インストーラは失敗します。

次の点に注意してください。

- インストーラがコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てるのは、それらのポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合だけです。デフォルトのポートが使用されている場合は、コンポーネントのポート番号範囲にある別のポートが試されます。たとえば、中間層の Oracle HTTP Server のデフォルトの非 SSL ポートはポート 80 です。このポートを別のアプリケーションが使用している場合は、インストーラによって 7777 ~ 7877 の範囲にあるポートが割り当てられます。
- Oracle HTTP Server のデフォルトのポートは、インストール・タイプ (表 3-4) に依存します。中間層はポート 80 および 443 を取得します。これは、中間層にアプリケーションを配置するためです。ユーザーは、中間層の Oracle HTTP Server/OracleAS Web Cache に対し、アプリケーションにアクセスするためのリクエストを送信します。

表 3-4 のカッコ内の値は、デフォルトのポートが使用中である場合に Oracle HTTP Server に割り当てられるポートを示しています。

表 3-4 Oracle HTTP Server のデフォルトのポート

インストール・タイプ	デフォルトの非 SSL ポート	デフォルトの SSL ポート
OracleAS Infrastructure	7777 (7777 - 7877)	4443 (4443 - 4543)
中間層	80 (7777 - 7877)	443 (4443 - 4543)

- ポートが使用中かどうかを判定するために、インストーラが services ファイルをチェックすることはありません。

services ファイルは C:\¥%SystemRoot%\¥system32¥drivers¥etc ディレクトリにあります。この %SystemRoot% は、Windows 2003 では windows です。

3.6.4 カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能)

コンポーネントにカスタム・ポート番号を割り当てるようにインストーラに指示する手順は次のとおりです。

1. コンポーネント名とポート番号を含んだファイルを作成します。ファイル・フォーマットは、第 3.6.4.1 項「staticports.ini ファイルのフォーマット」を参照してください。このファイルには、一般に staticports.ini という名前が付けられますが、名前は自由に指定できます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへの完全なパスを入力します。

ファイルへの完全なパスを指定しないと、インストーラはファイルを検出できません。この場合インストーラは、警告を表示することなくすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。

以前のリリースとの違い: 10g (9.0.4) では、コマンドライン・オプションを使用して staticports.ini ファイルを指定していました。このリリースでは、新しい「ポート構成オプションの指定」画面でファイルを指定します。

3.6.4.1 staticports.ini ファイルのフォーマット

staticports.ini ファイルのフォーマットは次のとおりです。port_num は、コンポーネントに使用するポート番号で置き換えてください。

```
# J2EE and Web Cache
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
Java Object Cache port = port_num
DCM Java Object Cache port = port_num
DCM Discovery port = port_num
Oracle Notification Server Request port = port_num
Oracle Notification Server Local port = port_num
Oracle Notification Server Remote port = port_num
Application Server Control port = port_num
Application Server Control RMI port = port_num
Oracle Management Agent port = port_num
Web Cache HTTP Listen port = port_num
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
Web Cache Administration port = port_num
Web Cache Invalidation port = port_num
Web Cache Statistics port = port_num
Log Loader port = port_num
ASG port = port_num

# Business Intelligence and Forms
Reports Services SQL*Net port = port_num
Reports Services discoveryService port = port_num
Reports Services bridge port = port_num

# Infrastructure
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
Ultra Search HTTP port number = port_num
```

このファイルを作成する場合は、CD-ROM (ディスク 1) または DVD-ROM の staticports.ini ファイルをテンプレートとして使用する方法が最も簡単です。

1. CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルを、ハード・ディスクにコピーします。

表 3-5 CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルの場所

メディア	staticports.ini ファイルの場所 (E: が CD-ROM または DVD-ROM ドライブである場合)
CD-ROM	Disk 1: E:¥stage¥Response¥staticports.ini
DVD-ROM	E:¥application_server¥stage¥Response¥staticports.ini

2. ローカル・コピー (ハード・ディスク上のファイル) を編集して必要なポート番号を指定します。

staticports.ini ファイル内のすべてのコンポーネントにポート番号を指定する必要はありません。ファイルに列記されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が使用されます。

次の例では、Application Server Control のポートといくつかの OracleAS Web Cache のポートを設定しています。指定されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が割り当てられます。

```
Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003
```

インストーラが完了したら、ORACLE_HOME¥install¥portlist.ini ファイルで、割り当てられたポートを確認できます。

ポート番号選択時の注意事項：

- ポート番号は 65535 より大きくすることができません。
 - Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート番号を設定する場合は、必ず第 3.6.4.3 項「Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート」を読んでください。
-
-

インストーラは、メモリーをチェックすることで、ファイルに指定されたポートが使用可能であることを確認します。つまり、実行中のプロセスが使用しているポートのみを検出できます。インストーラが、構成ファイルを参照してアプリケーションが使用しているポートを判定することはありません。

指定したポートが使用不可能であることが検出されると、アラートが表示されます。使用不可能なポートは割り当てられません。これを解決するには、次の操作を実行します。

1. staticports.ini ファイルを編集して別のポートを指定するか、ポートを使用するアプリケーションをシャット・ダウンします。
2. 「再試行」をクリックします。staticports.ini ファイルが再び読み取られ、ファイル内のエントリが再度確認されます。

portlist.ini を staticports.ini ファイルとして使用

staticports.ini ファイルは、Oracle Business Intelligence のインストール後に作成される ORACLE_HOME¥install¥portlist.ini ファイルと同じフォーマットを使用します。Oracle Business Intelligence をすでにインストールし、別のインストールで同じポート番号を使用する場合は、最初のインストールで作成された portlist.ini ファイルを、後続のインストールの staticports.ini ファイルとして使用します。

portlist.ini ファイルは、ORACLE_HOME¥install¥ディレクトリにあります。

ただし、staticports.ini の Oracle Management Agent port 行が、portlist.ini の Enterprise Manager Agent port 行に対応していることに注意してください。

3.6.4.2 エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートに代わって使用されるケース

誤ってインストーラが警告を表示せずにデフォルトのポートを使用する場合があるので、staticports.ini ファイルを慎重に確認します。確認の必要な点は次のとおりです。

- 複数のコンポーネントに同じポートを指定すると、指定したポートは最初のコンポーネントに使用され、その他のコンポーネントにはコンポーネントのデフォルトのポートが使用されます。複数のコンポーネントに同じポートを指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- staticports.ini ファイルに構文エラーがあると（たとえば、ある行で = 文字を省略した場合など）、インストーラはその行を無視します。このような行に指定されたコンポーネントには、デフォルトのポートが割り当てられます。行に構文エラーがあっても、インストーラからは警告が表示されません。

- コンポーネント名のスペルを間違えた場合、そのコンポーネントにはデフォルトのポートが割り当てられます。ファイル内のコンポーネント名は、大 / 小文字が区別されます。行に認識できない名前を指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、その行は無視され、コンポーネントにデフォルトのポート番号が割り当てられます。この場合、警告は表示されません。
- `staticports.ini` ファイルへの相対パス (`.\staticports.ini`、または単に `staticports.ini` など) を指定すると、ファイルが検出されなくなります。インストーラは警告を表示せずに処理を続行し、すべてのコンポーネントにデフォルト・ポートを割り当てます。`staticports.ini` ファイルへの完全なパスを指定する必要があります。

3.6.4.3 Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート

これらのコンポーネントにポートを設定する場合は、次の点を理解しておいてください。

Oracle HTTP Server の `httpd.conf` ファイルでは、`Port` および `Listen` ディレクティブで、OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server が使用するポートを指定します。`staticports.ini` ファイルでこれらのポートを設定するための適切な行は、構成中のコンポーネントによって異なります。

OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server を構成する場合

1. OracleAS Web Cache のポートを設定します。

OracleAS Web Cache は、`Port` ディレクティブで指定されたポートを使用します (図 3-1)。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen port = port_number
```

OracleAS Web Cache の SSL ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_number
```

この場合、Oracle HTTP Server `port` 行を使用してポート番号を設定することはできません。`staticports.ini` ファイルに Oracle HTTP Server `port` 行と Web Cache HTTP Listen `port` 行の両方が含まれている場合は、Oracle HTTP Server `port` 行が無視されます。たとえば、`staticports.ini` に次の行を指定したとします。

```
Web Cache HTTP Listen port = 7979
Oracle HTTP Server port = 8080
```

`Port` ディレクティブは 7979 に設定されます。

2. Oracle HTTP Server のポートを設定します。

Oracle HTTP Server は、`Listen` ディレクティブで指定されたポートを使用します。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen port = port_number
```

SSL リスニング・ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_number
```

図 3-1 OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server の両方を構成する場合



Oracle HTTP Server のみを構成する場合（OracleAS Web Cache は構成しない）

Oracle HTTP Server のみを構成する場合、Oracle HTTP Server は、Port ディレクティブと Listen ディレクティブの両方を使用します（図 3-2）。この場合は、両方のディレクティブが同じポート番号を使用するように設定する必要があります。

これらのポートを設定するには、staticports.ini ファイルの Oracle HTTP Server port 行と Oracle HTTP Server Listen port 行を使用します。次に例を示します。

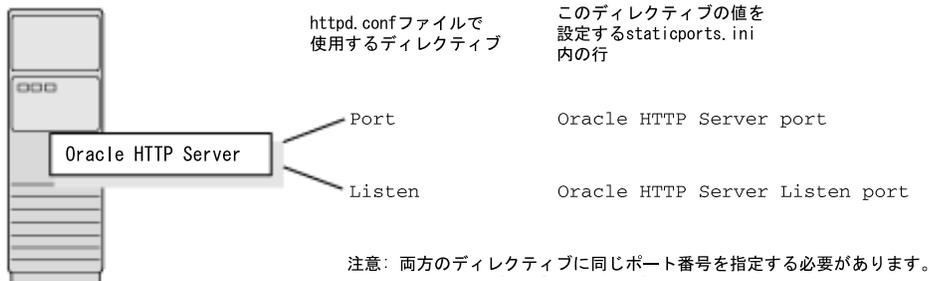
```
Oracle HTTP Server port = 8080
Oracle HTTP Server Listen port = 8080
```

これらのポートの SSL バージョンを設定するには、次の行を使用します。非 SSL バージョンの場合と同様に、ポート番号は同じにする必要があります。

```
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

staticports.ini に Web Cache 行を指定しても、OracleAS Web Cache を構成していないのでそれらの行は無視されます。

図 3-2 Oracle HTTP Server のみを構成する場合



3.7 オペレーティング・システム・ユーザー

インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーは、Administrators グループに属している必要があります。オペレーティング・システム・ユーザーが Administrators グループに属しているかどうかをチェックするには、次の手順を実行します。

ユーザーが Administrators グループに属しているかどうかをチェックする手順は次のとおりです。

1. 「コンピュータの管理」ダイアログ・ボックスを表示します。

これを行うには、デスクトップでローカル・コンピュータのアイコンを右クリックし、「管理」をクリックします。

2. 左側で「ローカルユーザーとグループ」を開き、「ユーザー」を選択します。

3. 右側で、ユーザーを右クリックし、「プロパティ」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを表示します。
4. 「所属するグループ」タブを選択します。

Administrators グループのメンバーではない場合は、このグループへの追加を管理者に依頼するか、Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。

3.8 環境変数

Oracle Business Intelligence をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、表 3-6 に示された環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 3-6 環境変数のまとめ

環境変数	設定または設定解除
ORACLE_HOME および ORACLE_SID	影響なし（インストーラがこの 2 つの環境変数を設定解除する）
PATH および CLASSPATH	長さを 1023 文字以下にする必要がある。
TNS_ADMIN	設定しない。
TEMP	オプション。設定解除すると、デフォルトで C:\%temp に設定される。

3.8.1 環境変数の設定

Windows で環境変数を設定する手順は次のとおりです。

1. コントロール・パネルの「システム」を表示します。
これを行うには、「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「詳細設定」タブをクリックします。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 変数の値を変更するには、変数を選択し、「編集」をクリックします。

3.8.2 ORACLE_HOME および ORACLE_SID

インストーラを起動すると、ORACLE_HOME および ORACLE_SID 環境変数が、設定されているかどうかに関係なく設定解除されます。

3.8.3 PATH および CLASSPATH

PATH 環境変数は、1023 文字以内で指定する必要があります。この文字数を超えると、インストーラが失敗する場合があります。

3.8.4 TNS_ADMIN

インストーラを実行するときに、TNS_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認します。設定されていると、インストール中にエラーが発生する場合があります。

3.8.5 TEMP

インストール中、インストーラは一時ディレクトリに一時ファイルを書き込む必要があります。デフォルトの一時ディレクトリは、C:\%temp です。

インストーラで C:\%temp 以外のディレクトリが使用されるようにするには、TEMP 環境変数を代替ディレクトリのフルパスに設定します。

この環境変数を設定せず、デフォルトのディレクトリに十分な領域がない場合、環境設定が設定されていないというエラー・メッセージがインストーラによって表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を解放してください。どちらの場合も、インストールをやりなおす必要があります。

3.9 %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル

Windows の hosts ファイルは %WINDIR%\system32\drivers\etc\ にあります。
%WINDIR% は、Windows オペレーティング・システム・ディレクトリを指定します。一般に、Windows 2003 の場合は C:\WINDOWS です。

%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイルの内容は、デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所および Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名に影響します。

これとは別に、hosts ファイルを編集することなく必要な値を入力する方法もあります。詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

3.10 ネットワーク関連トピック

一般に、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Business Intelligence のインストールを格納するローカル・ストレージ、ディスプレイ・モニター、および CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えています。

この項では、一般的なシナリオとは一致しないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする手順について説明します。取り上げるケースは次のとおりです。

- 第 3.10.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」
- 第 3.10.2 項「マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール」
- 第 3.10.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」
- 第 3.10.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」
- 第 3.10.5 項「後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール」
- 第 3.10.6 項「ループバック・アダプタのインストール」
- 第 3.10.7 項「ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール」
- 第 3.10.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」
- 第 3.10.9 項「NFS がマウントされたストレージへのインストール」
- 第 3.10.10 項「1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行」
- 第 3.10.11 項「NIS および NIS+ のサポート」

3.10.1 DHCP コンピュータへのインストール

DHCP コンピュータで Oracle Business Intelligence を実行する場合の制限事項: DHCP コンピュータ上の Oracle Business Intelligence インスタンスは、他のコンピュータで実行されているインスタンスと通信できません。互いに通信する必要があるインスタンスは、すべて同じコンピュータで実行する必要があります。クライアントに対する制限はありません。他のコンピュータのクライアントは、ネットワーク上で DHCP コンピュータを特定できれば、そのコンピュータで実行されているインスタンスにアクセスできます。

3.10.2 マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール

マルチホーム・コンピュータには、複数の IP アドレスが関連付けられています。これは、コンピュータに複数のネットワーク・カードを搭載することで実現されます。各 IP アドレスにはホスト名が関連付けられています。また、ホスト名に別名を設定することもできます。Oracle Universal Installer では、ホスト名を検出するために、デフォルトで ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定が使用されます。ORACLE_HOSTNAME が設定されておらず、複数のネットワーク・カードを持つコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合、ホスト名は hosts ファイル（通常の場合は DRIVE_LETTER:¥WINDOWS¥system32¥drivers¥etc）ファイルの最初の名前を使用して特定されます。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用してコンピュータにアクセスすることが必要です。チェックするには、クライアント・コンピュータから短縮名（ホスト名のみ）および完全名（ホスト名とドメイン名）を使用してホスト名に ping します。どちらも成功する必要があります。

環境変数の設定の詳細は、[第 3.8.1 項「環境変数の設定」](#)を参照してください。

3.10.3 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、単一の IP と複数の別名でネーミング・サービスに登録されたコンピュータを参照します。ネーミング・サービスによって、これらの別名が同じコンピュータへと解決されます。

このようなコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールするには、事前に次の作業が必要です。

- コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。

ループバック・アダプタによって、Oracle Business Intelligence がホスト名をクエリーしたときに常に同じ名前が返されるようになります（クエリーがローカルに実行されるため）。ループバック・アダプタがないと、クエリーからコンピュータのいずれかの別名が返される場合があります（クエリーがネーミング・サービスから応答を受け取るため）。

ループバック・アダプタをインストールする手順については、[第 3.10.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

3.10.4 ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール

ラップトップなどのネットワークに接続されていないコンピュータにも Oracle Business Intelligence をインストールできます。ネットワークに接続されていないコンピュータは他のコンピュータにアクセスできないため、必要なすべてのコンポーネントをインストールする必要があります。

ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールし、インストール後もそのコンピュータをネットワークに接続しない場合は、ネットワークに接続されていないユーザーのコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールします。

注意： ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールする場合は、Reports Server にアクセスできるように Common Object Service (COS) ネーミング・サービスを構成します。ネーミング・サービスの構成については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

ただし、インストール後にコンピュータをネットワークに接続する場合は、このコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする前に、次の手順を実行してください。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。第 3.10.6 項「ループバック・アダプタのインストール」を参照してください。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスで、ネットワークに接続されたコンピュータがシミュレートされます。コンピュータをネットワークに接続すると、Oracle Business Intelligence でローカル IP とホスト名が使用されます。

2. ホスト名と完全修飾名のみを使用して、対象のコンピュータに対しそのコンピュータ自体から ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールする場合、次のようにチェックします。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns local IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com   Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns local IP.
```

注意： コンピュータに対してそのコンピュータ自体から ping すると、ping コマンドによりローカル IP (ループバック・アダプタの IP) が返されます。

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に連絡してください。

インストール後のコンピュータのネットワークへの接続

インストール後にコンピュータをネットワークに接続すると、コンピュータ上の Oracle Business Intelligence インスタンスがネットワーク上の他のインスタンスと連動するようになります。コンピュータにはループバック・アダプタがインストールされているはずですが、接続するネットワークに応じて、コンピュータは静的 IP または DHCP を使用できます。

詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3.10.5 後でネットワークから切断する静的 IP コンピュータへのインストール

ネットワークに接続された静的 IP アドレスを使用するコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールし、ネットワークから切断した後もそのコンピュータで Oracle Business Intelligence を実行できるようにする場合は、Oracle Business Intelligence をインストールする前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、第 3.10.6 項「ループバック・アダプタのインストール」を参照してください。

ループバック・アダプタがないと、ネットワークからコンピュータを切断した時点で静的 IP を使用できなくなるために Oracle Business Intelligence が正しく機能しなくなります。

2. ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。チェックするには、対象のコンピュータに対し、そのコンピュータ自体から (1) ホスト名のみ、および (2) 完全修飾名を使用して ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合は、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com   Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
```

コンピュータに対してそのコンピュータ自体から ping すると、ping コマンドによりループバック・アダプタの IP が返されます。コンピュータのネットワーク IP は返されません。

前述の手順は、コンピュータが静的 IP と DHCP のどちらを使用しているかに関係なく必要です。DHCP コンピュータの場合は、すでに説明したようにループバック・アダプタが必要です。[第 3.10.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)を参照してください。

ネットワークからコンピュータを切断すると、そのコンピュータはどのネットワーク・リソースにもアクセスできなくなります。

3.10.6 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタは、次の場合に必要です。

- DHCP コンピュータにインストールする場合 ([第 3.10.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)を参照)。
- ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールし、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する予定の場合 ([第 3.10.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」](#)を参照)。

ループバック・アダプタをインストールする手順は、Windows のバージョンによって異なります。

- [第 3.10.6.1 項「ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック」](#)
- [第 3.10.6.2 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)
- [第 3.10.6.3 項「ループバック・アダプタの削除」](#)

3.10.6.1 ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかをチェックするには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、ループバック・アダプタの一連の値を示すセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:
  Connection-specific DNS Suffix . . . :
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50
  DHCP Enabled. . . . . : Yes
  Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

3.10.6.2 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタをインストールする手順は次のとおりです。

1. 「スタート」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックします。ハードウェアの追加ウィザードが開始されます。
3. 最初のページで、「次へ」をクリックして、「ハードウェアは接続されていますか？」ページを表示します。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」ページで、「はい、ハードウェアを接続しています」を選択します。
5. 「次へ」をクリックして、「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています」ページを表示します。

6. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています」 ページで、「新しいハードウェア デバイスの追加」を選択します。
7. 「次へ」をクリックして、「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます」 ページを表示します。
8. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます」 ページで、「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択します。
9. 「次へ」をクリックして、「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください」 ページを表示します。
10. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください」 ページで、「ネットワーク アダプタ」を選択します。
11. 「次へ」をクリックして、「ネットワーク アダプタの選択」 ページを表示します。
12. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページ：
 - a. 「製造元」の一覧から「Microsoft」を選択します。
 - b. 「ネットワーク アダプタ」の一覧から「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
13. 「次へ」をクリックして、「ハードウェアをインストールする準備ができました」 ページを表示します。
14. 「ハードウェアをインストールする準備ができました」 ページで、「次へ」をクリックして、「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページを表示します。
15. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページで、「完了」をクリックします。
16. (Windows 2003) コンピュータを再起動します。
17. デスクトップの「マイ ネットワーク」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。コントロール・パネルの「ネットワーク接続」が表示されます。
18. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常、「ローカルエリア接続 2」となります。「プロパティ」を選択します。
19. 「全般」タブで「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
20. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスに、次の値を入力します。
IP アドレス : ループバック・アダプタ用にルーティング不可能な IP を入力します。次のルーティング不可能なアドレスをお勧めします。
 192.168.x.x (x は、1 ~ 255 までの任意の値)
 10.10.10.10
サブネット マスク : 255.255.255.0 と入力します。
 他のフィールドはすべて空欄のままにします。
 「OK」をクリックします。
21. 「ローカルエリア接続 2」の「プロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
22. コンピュータを再起動します。
23. C:\¥winnt¥system32¥drivers¥etc¥hosts ファイルに、次のフォーマットで行を追加します。
 IP_address hostname.domainname hostname
 この行は、ファイル内の localhost 行の後にある必要があります。

`IP_address` を、手順 20 で入力したルーティング不可能な IP アドレスで置き換えます。

`hostname` および `domainname` を該当する値に書き換えます。

例：

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

24. ネットワーク構成を確認します。

- a. コントロール・パネルの「システム」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フルコンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。
- b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されます。
- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます。

3.10.6.3 ループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタを削除する手順は次のとおりです。

1. コントロール・パネルの「システム」を表示します。
これを行うには、「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を開きます。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「削除」を選択します。

3.10.7 ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD-ROM からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストールすることができます。ネットワークで Oracle Business Intelligence のインスタンスを多数インストールする場合や、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD-ROM ドライブがない場合は、ハード・ドライブからインストールする方が簡単です。

リモートの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストールすることもできます。第 3.10.8 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」を参照してください。

ハード・ドライブからインストールするときは、CD-ROM の交換を要求されません。ファイルが適切な場所にあれば、それらがすべて検出されます。

他のコンピュータからハード・ドライブへのアクセス

CD-ROM または DVD-ROM の内容をコピーしたハード・ドライブから、リモート・コンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする手順は次のとおりです。

1. ローカル・コンピュータでハード・ドライブを共有します。
2. Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータで、共有ハード・ドライブへのマッピングを行います。
3. Oracle Business Intelligence をインストールするリモート・コンピュータからインストーラを起動します。

インストーラにアクセスするには、マッピングされたドライブのドライブ文字を使用する必要がありますので注意してください（たとえば `H:\orawinfrs_10_1_2\setup.exe`）。

汎用名前付け規則（UNC）の構文（`\\hostname\sharename`）を使用してインストーラにアクセスすることはできません。

CD-ROM をコピーするには

1. 親ディレクトリ (orawinfrs など) を作成し、親ディレクトリの下に Disk1 や Disk2 などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は、DiskN にする必要があります (N は CD-ROM の番号)。

2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

ファイルのコピーには、Windows エクスプローラまたはコマンドラインを使用できます。コマンドラインを使用する場合は、xcopy コマンドを使用できます。

次の例では、E: を CD-ROM ドライブと想定し、C:¥orawinfrs¥DiskN を CD-ROM のコピー先ディレクトリとしています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk1 C:¥orawinfrs¥Disk1
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk2 C:¥orawinfrs¥Disk2
... Repeat for each CD-ROM.
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、Disk1 ディレクトリから setup.exe 実行可能ファイルを起動します。これは、Oracle Business Intelligence を実行することになるコンピュータから実行します。

```
C:¥> cd orawinfrs¥Disk1
C:¥orawinfrs¥Disk1> setup.exe
```

orawinfrs ディレクトリを DVD-ROM からコピーするには

orawinfrs ディレクトリは、Windows エクスプローラまたはコマンドラインでコピーできます。コマンドラインを使用する場合の手順は次のとおりです。

1. (オプション) orawinfrs ディレクトリをコピーするディレクトリを作成します。
2. orawinfrs ディレクトリを、DVD からハード・ディスクにコピーします。

この例では、E: を DVD-ROM ドライブと想定し、C:¥orawinfrs をコピー先のディレクトリとしています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥orawinfrs C:¥orawinfrs
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Business Intelligence を実行する予定のコンピュータから runInstallersetup.exe 実行可能ファイルを起動します。

```
C:¥> cd orawinfrs
C:¥orawinfrs> setup.exe
```

3.10.8 リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、リモートの CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行できます。次の作業が完了していることを確認します。

リモート・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの共有

使用するリモートの CD-ROM または DVD ドライブで、共有アクセスが許可されている必要があります。これを設定するには、CD-ROM または DVD ドライブを備えたリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータに Administrator ユーザーでログオンします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブのドライブ文字を右クリックし、Windows 2003 の場合は「共有とセキュリティ」を選択します。

4. 「共有」タブ (図 3-3) で次の作業を行います。

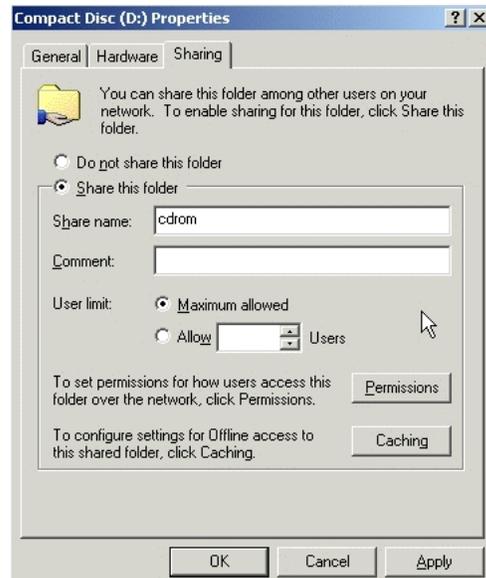
「このフォルダを共有する」を選択します。

「共有名」に、cdrom や dvd などの共有名を入力します。この名前は、ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブをマッピングするときに使用します。3-23 ページの手順 d を参照してください。

「アクセス許可」をクリックします。このフォルダにアクセスして Oracle Business Intelligence をインストールするユーザーには、少なくとも読取り権限が必要になります。

作業が完了したら「OK」をクリックします。

図 3-3 CD-ROM ドライブの共有



5. CD-ROM: Oracle Business Intelligence の Disk 1 を、CD-ROM ドライブに挿入します。
DVD: Oracle Business Intelligence の DVD を、DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブのマッピング

CD-ROM または DVD ドライブをマッピングしてインストーラを実行するには、ローカル・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモートの CD-ROM または DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」→「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択します。「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. リモートの CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」に、リモートの CD-ROM または DVD ドライブの場所を次のフォーマットで入力します。

`¥¥remote_hostname¥share_name`

`remote_hostname` は、CD-ROM または DVD ドライブを備えたリモート・コンピュータの名前で置き換えてください。

`share_name` は、3-23 ページの手順 4 で入力した共有名で置き換えてください。

例: `¥¥computer2¥cdrom`

- e. リモート・コンピュータに別のユーザーとして接続する必要がある場合は、「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - f. 「完了」をクリックします。
2. マッピングした CD-ROM または DVD ドライブからインストーラを実行します。
- インストーラから CD-ROM の交換を要求されたら、CD-ROM を取り出し、要求された CD-ROM を挿入します。

注意： CD-ROM を交換するときは、インストーラが実行している必要があります。CD-ROM を交換するときはインストーラを終了しないでください。インストーラを終了した場合、中止した時点から作業を継続することはできません。また、部分的に作成されたインストールは使用できず、場合によっては手動で削除する必要があります。

3.10.9 NFS がマウントされたストレージへのインストール

標準の NFS を使用する Sun コンピュータでは、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができません。Network Appliance (NetApp) Filers などの、NFS がマウントされた認定ストレージ・システムを使用する必要があります。Oracle Business Intelligence は、NFS がマウントされたストレージ・システムでの実行を承認されています。

NetApp システムは、少なくともリモート・インストール・ユーザーとリモート root ユーザーにエクスポートする必要があります。これは、`exportfs` コマンドで実行できます。

```
prompt> exportfs -i /vol/vol1
```

あらゆる更新について最新の動作保証リストを確認するには、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) にアクセスしてください。

3.10.10 1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行

Oracle Business Intelligence のコンポーネントは、インストール先のコンピュータでのみ実行されるようになっています。リモート・コンピュータから NFS 経由でファイルにアクセスできる場合でも、それらのコンピュータでコンポーネントを実行することはできません。

3.10.11 NIS および NIS+ のサポート

NIS および NIS+ 環境で、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができません。これらの環境の詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

3.11 インストーラによる前提条件チェック

表 3-7 には、インストーラによって実行されるチェックが示されています。

表 3-7 インストーラによる前提条件チェック

項目	説明
ユーザー	ユーザーに管理権限があるかどうかをチェックされます。
プロセッサ	プロセッサのスピード要件は、表 3-2 を参照してください。
モニター	モニターが少なくとも 256 色を表示するかどうかをチェックされます。
オペレーティング・システムのバージョン	サポートされているバージョンについては、表 3-2 を参照してください。
Windows サービス・パック	サポートされているサービス・パックは、表 3-2 を参照してください。
メモリー	推奨値は、表 3-2 を参照してください。

表 3-7 インストーラによる前提条件チェック (続き)

項目	説明
ページファイル (仮想メモリー) の合計サイズ	推奨値は、表 3-2 を参照してください。
TEMP ディレクトリ領域	推奨値は、表 3-2 を参照してください。
インスタンス名	Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに、同じ名前のインスタンスが存在していないかがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの名前	Oracle ホーム・ディレクトリの名前に空白が含まれていないかがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリのパス	Oracle ホーム・ディレクトリのパスが 127 文字未満かどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	Oracle ホーム・ディレクトリにインストールを妨げる可能性があるファイルが含まれていないかがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>Oracle Business Intelligence は、新しいディレクトリにインストールする必要があります。許可されないインストールの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server (全種類) を 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 のデータベースの Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Management Service の Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle HTTP Server のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を OracleAS Web Cache のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server (全種類) を Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) Oracle Business Intelligence を Infrastructure 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle ホームにインストールする ■ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) Oracle Business Intelligence を Oracle9iAS 中間層 9.0.2 または 9.0.3 の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Developer Kits を OracleAS Infrastructure 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Developer Kits を Oracle9iAS 中間層 9.0.2 または 9.0.3 の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Developer Kits を Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle9iAS 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) Oracle Business Intelligence または OracleAS Developer Kits の Oracle ホームにインストールする ■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle ホームにインストールする

表 3-7 インストーラによる前提条件チェック (続き)

項目	説明
静的ポートの競合	指定されている場合は、staticports.ini ファイルに記載されているポートを、インストーラがチェックします。第 3.6 項「ポート」を参照してください。
Oracle Enterprise Manager ディレクトリの書き込み確認	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。ユーザーがインストーラを実行するオペレーティング・システムで、これらのディレクトリが書き込み可能かどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ORACLE_HOME¥sysman¥emd ■ ORACLE_HOME¥sysman¥config ■ ORACLE_HOME¥sysman¥webapps¥emd¥WEB-INF¥config
Oracle Enterprise Manager ファイルの存在	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Business Intelligence を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。これらのファイルが存在するかどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ORACLE_HOME¥sysman¥config¥iasadmin.properties ■ ORACLE_HOME¥sysman¥webapps¥emd¥WEB-INF¥config¥consoleConfig.xml

Oracle Business Intelligence のインストール

この章では、Oracle Business Intelligence コンポーネントのインストール手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 4.1 項 「Oracle Universal Installer の起動」
- 第 4.2 項 「Oracle Business Intelligence のインストール」
- 第 4.3 項 「インストール後の作業」
- 第 4.4 項 「コンポーネントの起動」
- 第 4.5 項 「サンプルの使用」
- 第 4.6 項 「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」
- 第 4.7 項 「次の作業」

4.1 Oracle Universal Installer の起動

Windows では、この項で説明する手順に従ってインストーラを起動します。

インストール時に Windows システム・ファイルでエラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じます。次に、第 4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」で説明する手順に従ってください。

Oracle Universal Installer を起動するには、次の手順を実行します。

1. Oracle データベースなどの Oracle サービスをすべて停止します。

インストーラの実行方法は、次の手順で説明するように、Oracle Business Intelligence の入手方法によって異なります。
2. Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD がある場合
 - a. CD-ROM または DVD を、使用しているコンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに挿入します。
 - b. 自動実行機能を使用している場合は、「ようこそ」ページに表示される情報を確認します。

Windows の障害支援技術を使用している場合: 自動実行機能を使用不可にするには、CD-ROM または DVD を挿入した直後に [Shift] キーを押します（自動実行のウィンドウが表示されている場合は、[Alt]+[F4] キーを押してウィンドウを閉じます）。
 - c. Windows エクスプローラを使用して CD-ROM または DVD のルート・ディレクトリで `setup.exe` ファイルを検索し、このファイルをダブル・クリックしてインストーラを起動します。
3. OTN から Oracle Business Intelligence を zip ファイルとしてダウンロードした場合
 - a. zip ファイルをローカル・ディレクトリ（たとえば、`D:\%mytempdir`）に抽出します。
 - b. Windows エクスプローラを使用して Disk1 ディレクトリで `setup.exe` ファイルを検索し、このファイルをダブル・クリックしてインストーラを起動します。

4.1.1 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Business Intelligence では、使用している Windows システム・ディレクトリ内にいくつかのファイルが必要です。Oracle Business Intelligence のインストール時には、使用しているコンピュータにすでに存在しているファイルが Oracle Business Intelligence の要件を満たしているかどうかを確認されます。ファイルが存在しない場合、または存在しているが内容が古い場合は、必要なファイルがインストールされます。

古いファイルがインストール時に他のプロセスで使用されている場合はインストーラが停止し、エラー・ダイアログ・ボックスが表示されます。これは、更新したファイルを有効にするために Windows の再起動が必要なためです。インストーラは、自動的にシャットダウンしてシステムの再起動後に再び起動することができません。

Oracle Business Intelligence には、必要な Windows システム・ファイルの補足インストール機能があります。インストールが終了すると、必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Business Intelligence のインストール時に Windows システム・ファイルでエラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、次の手順に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しない場合は、Oracle Business Intelligence のインストールを続行できません。

Windows システム・ファイルのインストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 「終了」をクリックしてインストーラを終了します。
2. CD-ROM または DVD のルート・ディレクトリに移動します。

3. wsf.exe を実行します。

Windows システム・ファイル・インストーラは、既存の Oracle ホームを検索するスクリプトによって制御されます。Oracle ホームが見つからない場合は、ファイルの場所ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスから、Oracle ホームを選択します。

必要な場合には Windows が自動的に再起動されます。それ以外の場合は、インストール終了ダイアログ・ボックスが表示されないまま、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows が再起動した後、または Windows システム・ファイルのインストールが終了した後に、Oracle Business Intelligence のインストールを再開してください。

4.2 Oracle Business Intelligence のインストール

インストーラの各画面に移動するには、いくつかのボタンを使用します。「ヘルプ」をクリックすると、各画面の詳細情報が表示されます。「インストールされた製品」をクリックすると、使用しているコンピュータにすでにインストールされている Oracle ソフトウェアを確認できます。インストーラの前の画面または次の画面に移動するには、「戻る」または「次へ」をクリックします。「インストール」ボタンが使用可能な場合は、このボタンをクリックするとファイルのインストールが開始されます。「取消」をクリックすると、処理が停止してインストーラは終了します。さらに、「製品の削除」（「ようこそ」画面でのみ使用可能）をクリックすると、既存の Oracle ソフトウェアを削除できます。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Business Intelligence をインストールするには、次の手順を実行します。

1. [第 4.1 項「Oracle Universal Installer の起動」](#) で説明する手順に従って、インストーラを起動します。
2. 「ようこそ」画面に表示される Oracle Universal Installer に関する情報を確認し、「次へ」をクリックして続行します。

いくつかの前提条件がインストーラによって確認されます（詳細は、[第 1.4.2 項「インストーラによる前提条件チェック」](#)を参照）。

ターゲット・コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インストール関連ファイル用のインベントリ・ディレクトリが作成されます（インベントリ・ディレクトリの詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照）。

3. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の操作を実行します。

a. 「ソース・パス」フィールドのソース・パスを確認します。

ソース・パスは products.xml ファイルへのフルパスで、製品はここからインストールされます。インストーラは、デフォルト・パスを検出して使用します。このパスを変更しないでください。

b. インストール先名フィールドの Oracle ホーム名を確認します。

デフォルトの Oracle ホーム名を使用するか、他の名前を選択できます。

c. インストール先パスフィールドのインストール先パスを確認します。

インストール先パスはディレクトリ名と Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスで、ここに製品がインストールされます。表示されるデフォルト名とパスを使用するか、他の名前を選択できます。

インストール先パスは実在する絶対パスにする必要があります。環境変数名や空白を含めることはできません。Oracle ホーム・ディレクトリの選択方法については、[第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」](#)を参照してください。

d. 「次へ」をクリックして続行します。

4. 「言語の選択」画面で、次の操作を実行します。
 - a. Oracle Business Intelligence の実行時に表示する言語を選択します。

ヒント: 選択する言語が増えると、インストール時間も長くなります。ここで選択する言語によって、Discoverer Plus のヘルプで使用できる言語が決定します。異なる言語のヘルプを個別にインストールできることに注意してください (詳細は、[第 4.6.1 項「インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール」](#)を参照)。
 - b. 「次へ」をクリックして続行します。
5. インストールに使用できるメモリーがコンピュータに十分にあることを確認するように要求される場合があります。

ハードウェア要件の詳細は、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
6. 「ポート構成オプションの指定」画面で「自動」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして続行します。

注意: 「自動」オプションはほとんどのインストールで適切であるため、このオプションを選択することをお勧めします。ただし、staticports.ini という構成ファイルを指定すると、使用するポートを明示的に設定できます。staticports.ini ファイルのフォーマットと使用方法は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

7. 「送信メール・サーバー情報の指定」画面で、次の操作を実行します。
 - a. SMTP サーバーの詳細を指定します (例: smtp.oracle.com)。

SMTP サーバーを指定すると、エンド・ユーザーは、Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できます。

ヒント: 入力する SMTP サーバーの詳細が不明な場合、フィールドは空白のままにできます。インストール後に、Application Server Control を使用して SMTP サーバーを指定できます (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

注意: Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定の詳細は、[第 3.1 項「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」](#)を参照してください。
 - b. 「次へ」をクリックして続行します。
8. 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面で、Application Server Control を使用して Oracle Business Intelligence を管理する際に使用する情報を入力します。
 - a. 「インスタンス名」フィールドに、このインスタンスの名前を指定します。

指定した名前には、ホスト名とドメイン名が自動的に追加されることに注意してください。
 - b. ias_admin 管理者ユーザーのパスワードを指定します。
 - c. ias_admin 管理者ユーザーのパスワードを確認します。
 - d. 「次へ」をクリックして続行します。
9. 「サマリー」画面で、設定した内容を確認します。

設定を変更するには、「戻る」をクリックして適切な画面に戻ります。

注意: ディスク容量が不足している場合は、「必要な領域」に赤字で表示されます。

10. 「インストール」をクリックすると、ファイルのインストールが開始されます。

「インストール」画面が表示され、必要な Oracle Business Intelligence ファイルのコピーが開始されます。この画面では、インストール処理の進行状況を監視し、インストール・ログのフルパスを確認できます。インストール・ログの詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。

インストール処理を中断する場合は「インストールの中止」をクリックします。この場合は、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのインストールのみを停止するかを選択できます。製品すべてのインストールを停止することをお勧めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止すると、製品内の関連するコンポーネントが正常に動作しない場合があります。

11. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面で、自動的に実行された複数の Configuration Assistant のステータスを確認します。

Configuration Assistant を再試行するには（正常に完了しなかった場合など）、Configuration Assistant を選択して「**再試行**」をクリックします。

Configuration Assistant は中断しないことをお勧めします。

インストールが完了すると、インストールの終了画面が表示されます。

ヒント： Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示する URL をメモしてください。この URL は、別のコンポーネントを起動するために使用します（詳細は、[第 4.4 項「コンポーネントの起動」](#)を参照）。

12. 「終了」をクリックします。

インストール・プログラムの終了を確認するメッセージ・ダイアログ・ボックスが表示されます。

13. 「はい」をクリックしてインストーラを終了します。

Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが表示されます（有効なデフォルト Web ブラウザがシステムで見つかった場合）。「ようこそ」ページからは、次の項目にアクセスできます。

- クイック・ツアー
- チュートリアル
- サンプル
- ドキュメント
- Discoverer Plus および Discoverer Viewer（Discoverer Plus および Discoverer Viewer を使用する前に、インストール後の作業を 1 つ以上実行する必要がある場合があります。詳細は、[第 4.3 項「インストール後の作業」](#)を参照してください）。

注意： Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが自動的に表示されない場合は Web ブラウザを起動し、前にメモした「ようこそ」ページを表示する URL を入力します。

4.3 インストール後の作業

Oracle Business Intelligence に関するインストール後の作業は、次のように分類されます。

- [第 4.3.1 項「全般的なチェックリスト」](#)
- [第 4.3.2 項「すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業」](#)
- [第 4.3.3 項「コンポーネントに固有なインストール後の作業」](#)

注意：特に断りがないかぎり、ORACLE_HOME はインストール時に使用した Oracle Business Intelligence のホーム・ディレクトリを表します。

4.3.1 全般的なチェックリスト

インストール後の全般的なチェックリストを確認し、インストールと環境に適用する作業を行います。

- 第 4.3.1.1 項「更新」
- 第 4.3.1.2 項「TNS 名」
- 第 4.3.1.3 項「ポート番号」
- 第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」

4.3.1.1 更新

インストールが完了した後、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で最新の動作要件とソフトウェアの更新を確認してください。Oracle MetaLink では、技術情報にアクセスしたり、オラクル社カスタマ・サポート・センターからのサポートを受けられます。

Oracle Business Intelligence に関する最新情報は、OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>) で確認してください。

また、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) では、Oracle 製品や業界標準テクノロジーを使用するアプリケーションを作成、テストおよび配置する開発者向けのサービスや資料を入手できます。

4.3.1.2 TNS 名

エンド・ユーザーが Discoverer を使用する前に、ユーザーがクエリーするデータを含むデータベース（または、EUL がインストールされるデータベース）の `tnsnames.ora` ファイルにエントリを追加する必要があります。

`tnsnames.ora` ファイルと `sqlnet.ora` ファイルが `ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリにインストールされます。これらのファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新したり、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用して更新することもできます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリ内の『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

4.3.1.3 ポート番号

インストーラによって、ポートが必要な Oracle Business Intelligence コンポーネントに、ポートが自動的に割り当てられます。コンポーネントのインストール時にポートの競合が検出されると、そのコンポーネントに割り当てられたポート番号の範囲内で、別のポート番号が選択されます。

Discoverer は、Oracle HTTP Server と同じポート（ポート 80）を使用します。

Oracle Business Intelligence コンポーネントで使用するポート番号は、Application Server Control を使用して表示および変更ができます。Discoverer で使用するポート番号の表示と変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

4.3.1.4 Oracle Application Server Infrastructure との関連付け

Oracle Business Intelligence を使用するとき、Oracle Application Server Infrastructure を関連付けるかどうかは任意です。次のことができます。

- Infrastructure を関連付けずに Oracle Business Intelligence を実行できます。
- インストール後に、Oracle Business Intelligence を既存の Infrastructure に関連付けることができます。

Oracle Application Server Infrastructure は、Oracle Application Server 中間層の多くのコンポーネントを使用するための前提条件であることに注意してください。Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server Infrastructure に関連付けない場合は、次のような多くの Oracle Business Intelligence 機能が使用不可になります。

- Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット
- Discoverer での Single Sign-On (SSO) 機能
- パブリックおよびプライベートの Discoverer 接続（かわりに、Discoverer の「直接接続」ページが表示されます）

Oracle Business Intelligence と Oracle Application Server Infrastructure の関連付けの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

4.3.1.5 インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで障害支援技術と Java Access Bridge を使用する場合 (Windows のみ)

インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントでスクリーン・リーダーなどの障害支援技術を使用する場合は、Java Access Bridge をインストールして構成する必要があります。詳細は、第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」を参照してください。

4.3.2 すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業

Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- 第 4.3.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」
- 第 4.3.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」

4.3.2.1 マルチディメンション分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してマルチディメンション・データソースからデータをクエリーする前に、次の手順を完了する必要があります。

1. データベースをインストールして準備します。詳細は、第 4.3.2.1.1 項「Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法」を参照してください。
2. データ・ウェアハウスを設定します。

Oracle Business Intelligence Warehouse Builder を使用している場合は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。使用していない場合は、『Oracle 9i OLAP ユーザーズ・ガイド』（Oracle9i Database の場合）または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』（Oracle Database 10g の場合）を参照してください。

次の作業を実行します。

- スキーマのインストール
- 適切なメタデータの作成
- (オプション) アナリティック・ワークスペースの作成とコンテンツの追加
- ユーザーへの適切な権限の付与 (ユーザーには、OLAP のディメンション・テーブル、メジャーおよびビューに対する SELECT 権限が必要)

Discoverer Plus OLAP のすべてのユーザーには D4OPUB ロールがあるため、OLAP_USER ロールもあることに注意してください。OLAP_USER ロールによって、データベース内の OLAP メタデータにアクセスできます。

3. Application Server Control を使用して、ユーザーが接続する Oracle OLAP データベース・インスタンスに Discoverer カタログをインストールします。

カタログのインストール方法と構成方法の詳細は、次を参照してください。

- 『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』
- Application Server Control のヘルプ・システム

4. Application Server Control を使用して、データベース・ユーザーを認証します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

5. 必要に応じて、オプションの構成作業を実行します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

6. エンド・ユーザーに、Discoverer を起動してマルチディメンション・データソースに接続するために必要な情報を提供します。

エンド・ユーザーに必要な構成と情報の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

4.3.2.1 Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法

Oracle Database 10g Enterprise Edition に対して実行するには、次の作業を完了します。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。

- 手順については、OTN (Oracle Technology Network) から適切なプラットフォーム用の Oracle Database 10g Enterprise Edition インストール・ガイドをダウンロードして参照してください。

<http://www.oracle.com/technology>

- データベースのサポート対象バージョンの詳細は、[第 2.3 項「データベース要件」](#)を参照してください。

注意: データベース・クライアントをインストールする際、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に示す構成設定を使用して、データベースを構成します。BI Beans が正常に動作して実行されるように、構成設定には正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新規パッチ・セットをダウンロードするたびに新規バージョンをチェックしてください。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 3760779 をダウンロードします。

3. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このマニュアルは、OTN (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。適切なメタデータを定義しない場合は OLAP クエリーを作成できません。次のいずれかのツールを使用してメタデータを定義します。

- Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照。
- Oracle BI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照。
- Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照。

4.3.2.2 リレーショナル分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してリレーショナル・データソースからデータをクエリーするには、次のいずれかを使用して作成（またはアップグレード）された EUL へのアクセス権限が必要です。

- Discoverer EUL Command Line for Java（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』を参照）
- Oracle Business Intelligence Tools 10g 10.1.2 の CD-ROM または DVD に同梱されているバージョンの Discoverer Administrator（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照）

Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4 から EUL をアップグレード（EUL リリース番号 5.0.x）する場合は、次の事項に注意してください。

- Discoverer リリース 10.1.2 の EUL (EUL リリース番号 5.1.x) は、前のリリースの EUL を上書きします（つまり、前のリリースを削除してアップグレードします）。
- 既存のユーザーは、アップグレード処理中またはアップグレード処理の完了後に、Discoverer リリース 9.0.x を使用して EUL へはアクセスできません。

したがって、アップグレードの前に、前のリリースの EUL のバックアップを作成してください。

EUL の作成とアップグレードの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

4.3.3 コンポーネントに固有なインストール後の作業

コンポーネント固有のインストール後の作業を確認し、インストールと環境に適用する作業を実行します。

4.3.3.1 Discoverer のインストール後の作業

この項では、Discoverer のインストール後の作業について説明します。

4.3.3.1.1 分析の準備 Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」](#)
- [第 4.3.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」](#)

4.3.3.2 Discoverer Viewer のインストール後の作業

この項では、Discoverer Viewer のインストール後の作業について説明します。

4.3.3.2.1 分析の準備 Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.3.2.2 項「ワークブックの作成」](#)
- [第 4.3.3.2.3 項「SMTP 構成」](#)

4.3.3.2.2 ワークブックの作成 Discoverer Viewer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop を使用して作成したワークブックを使用してデータを分析します。Discoverer Viewer を使用してデータを分析するには、少なくとも 1 つのワークブックが作成されている必要があります。

4.3.3.2.3 SMTP 構成 エンド・ユーザーが Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できるようにするには、SMTP サーバーを使用するように Discoverer 中間層を構成する必要があります。インストール時に SMTP サーバーを指定していない場合は、後で指定することもできます（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

4.3.3.3 Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール後の作業

この項では、Discoverer Portlet Provider のインストール後の作業について説明します。

4.3.3.3.1 分析の準備 Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- 第 4.3.3.3.2 項「リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」
- 第 4.3.3.3.3 項「Discoverer Portlet Provider の登録」

4.3.3.3.2 リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 10.1.2 のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です（詳細は、第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

4.3.3.3.3 Discoverer Portlet Provider の登録 ユーザーが Discoverer ポートレットを Oracle Portal ページに追加するには、Discoverer Portlet Provider を Oracle Portal に登録する必要があります（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

4.4 コンポーネントの起動

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを起動する前に、前の各項で説明したインストール後の全般的な作業およびコンポーネント固有の作業を完了しておいてください。コンポーネントのインストール後の作業を完了した後は、次の各項で説明するように、コンポーネントを起動できます。

- 第 4.4.1 項「Discoverer Plus の起動」
- 第 4.4.2 項「Discoverer Viewer の起動」
- 第 4.4.3 項「Discoverer Portlet Provider の起動」

4.4.1 Discoverer Plus の起動

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「Discoverer Plus」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/plus` のように入力します。

注意: `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

4.4.2 Discoverer Viewer の起動

Discoverer Viewer を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「**Discoverer Viewer**」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/viewer` のように入力します。

注意: `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

4.4.3 Discoverer Portlet Provider の起動

注意: Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 10.1.2 のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です（詳細は、[第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け](#)」および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

Web ブラウザに次の URL を入力すると、Discoverer Portlet Provider が正常にインストールされたことを確認できます。

`http://host.domain:port/discoverer/portletprovider/`

ここで、

- `host.domain` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `port` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/portletprovider` のように入力します。

注意: `host.domain` および `port` はインストールの最後に表示されます。

インストール後にエンド・ユーザーが Discoverer ポートレットを作成する前に、Oracle Portal にログインして Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。これによって、Oracle Portal ユーザーは Discoverer ポートレット（ワークシート、ワークシートのリストまたはゲージ・ポートレット）を作成できます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Oracle Application Server Portal でのワークブック公開ガイド』を参照してください。

4.5 サンプルの使用

Discoverer 用の多くのサンプル・ワークブックを利用できます。これらのワークブックによって、マルチディメンション・データソースおよびリレーショナル・データソースのクエリー時に使用する Discoverer の機能が示されます。

サンプル・ワークブックを使用するには、次の手順を実行します。

1. `http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html` からサンプル・ワークブックをダウンロードします。
2. 使用しているマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。
3. ディレクトリに格納されているインストール手順に従います。

4.6 ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス

すべてのコンポーネントにはオンライン・ヘルプがあり、コンポーネントとともにインストールされます。コンポーネントの使用法の詳細は、このオンライン・ヘルプを参照してください。Discoverer Plus の場合は、Oracle Business Intelligence のインストール後に追加の翻訳済ヘルプ・ファイルもインストールできます（詳細は、第 4.6.1 項「インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール」を参照）。

コンポーネントによっては、さらにドキュメントが OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>) にある場合があります。このサイトでは、ホワイト・ペーパー、最新版のドキュメント、その他の付属資料も入手できます。

次の Oracle Business Intelligence ドキュメントは、Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD から利用できます。

- このマニュアル（Oracle Business Intelligence のインストレーション・ガイド）
- Oracle Business Intelligence のリリース・ノート

Oracle Business Intelligence ドキュメントを CD-ROM または DVD から直接表示するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザを使用して、CD-ROM または DVD の doc ディレクトリにある index.htm ファイルを開きます。
2. タブをクリックします。
3. ドキュメント・タイトルの横にある「HTML」または「PDF」リンクをクリックすると、ドキュメントの内容が表示されます。

4.6.1 インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール

インストール時には、選択した言語の Discoverer Plus ヘルプ・ファイルがインストールされます。インストール時に選択していない言語のヘルプ・ファイルが必要な場合は、そのヘルプ・ファイルを個別にインストールできます。

Discoverer Plus ヘルプ・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD の /extras ディレクトリから jar ファイルとして使用できます。Discoverer Plus OLAP と Discoverer Plus Relational のヘルプ・ファイルには、それぞれ別のサブディレクトリがあり、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

Oracle Business Intelligence のインストール後に別の言語のヘルプ・ファイルをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Business Intelligence CD-ROM または DVD の適切なディレクトリに移動します。
Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational のそれぞれに、次のサブディレクトリがあります。
 - Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/d4o ディレクトリに移動します。
 - Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/plus ディレクトリに移動します。
2. 表 4-1 を使用して、必要な言語の翻訳済ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルを識別します。

次に示すように、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

- Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、/extras/help/d4o ディレクトリにあり、名前は d4ohelp_locale_code.jar です。

- Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、
/extras/help/plus ディレクトリにあり、名前は plushelp_locale_code.jar
です。

locale_code は、次の表に示すいずれかの接尾辞です。

表 4-1 Discoverer Plus ヘルプの jar ファイルのロケール・コード接尾辞

ロケール・ コード接尾辞	言語	ロケール・ コード接尾辞	言語
_ar	アラビア語	_ko	韓国語
_cs	チェコ語	_nl	オランダ語
_da	デンマーク語	_no	ノルウェー語
_de	ドイツ語	_pl	ポーランド語
_el	ギリシャ語	_pt	ポルトガル語
_es	スペイン語	_pt_BR	ポルトガル語 (ブラジル)
_es_ES	スペイン語 (イベリア)	_ro	ルーマニア語
_fi	フィンランド語	_ru	ロシア語
_fr	フランス語	_sk	スロバキア語
_fr_CA	フランス語 (カナダ)	_sv	スウェーデン語
_hu	ハンガリー語	_th	タイ語
_it	イタリア語	_tr	トルコ語
_iw	ヘブライ語	_zh_CN	簡体字中国語
_ja	日本語	_zh_TW	繁体字中国語

- 中間層マシンの ORACLE_HOME¥discoverer¥plus_files¥help ディレクトリに、必要な jar ファイルを抽出します。

これで、その言語のヘルプが使用可能になります。

4.6.2 インストール後に必要な追加のフォントをインストール

インストール時に言語のサブセットをインストールした場合は、Discoverer で必要なすべてのフォントがインストールされない場合があります。必要なすべてのフォントがインストールされていない場合 (たとえば、Albany フォントの ALBANWTJ.TTF、ALBANWTK.TTF)、Discoverer では一部のテキストが制御文字で表示される場合があります。

必要な追加フォントは、MRUA およびユーティリティの CD-ROM または DVD の /utilities/fonts フォルダに格納されています。

Oracle Business Intelligence のインストール後に、必要な追加フォントをインストールするには、次の手順を実行します。

- MRUA およびユーティリティの CD-ROM/DVD の /utilities/fonts ディレクトリに移動します。
- MRUA およびユーティリティ CD-ROM または DVD の /utilities/fonts ディレクトリの内容を、Oracle Business Intelligence をインストールしたコンピュータの ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts フォルダにコピーします。

4.7 次の作業

インストール後に、次の作業を実行できます。

- クイック・ツアーを実行して、Oracle Business Intelligence の概要を理解します。クイック・ツアーを起動するには、次のいずれかを実行します。
 - (Windows のみ) Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「クイック・ツアー」を選択します。
 - Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://host.domain:port/quicktour/index.htm`

ここで、

- * `host.domain` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- * `port` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

注意： `host.domain` および `port` はインストールの最後に表示されます。

- 『Oracle Business Intelligence 概要』を読みます (詳細は、[第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」](#)を参照)。
- コンポーネント固有のユーザー・ドキュメントを読みます (詳細は、[第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」](#)を参照)。
- Oracle Business Intelligence の使用を開始します (詳細は、[第 4.4 項「コンポーネントの起動」](#)を参照)。

前述のすべてのリソースには、Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページからアクセスできます。Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示するには、次のいずれかを実行します。

- (Windows のみ) Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「ようこそ」ページを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>`

`host.domain` の定義は前述のとおりです。

Oracle Business Intelligence の 削除と再インストール

この章では、Oracle Business Intelligence を削除する手順について説明します。複数またはすべてのコンポーネントを削除する場合は、この章で説明する順序に従ってください。

この章では、実行する順序に従って削除手順を説明します。

- [第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)
- [第 5.2 項「Oracle Business Intelligence の再インストール」](#)

5.1 Oracle Business Intelligence の削除

注意: この章では、マシンから Oracle Business Intelligence インストールを削除する方法を説明します。関連付けられた Oracle Application Server Infrastructure インストールを削除する場合は、Oracle Business Intelligence の削除とは別に実行する必要があります (詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照)。

使用しているコンピュータから Oracle Business Intelligence を削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。次に、削除処理の手順を説明します。

インストーラを使用して Oracle Business Intelligence を削除するには、次の手順を実行します。

1. 次の手順に従って、削除処理を開始する前に Oracle サービスをすべて停止します。
 - a. Windows の「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択して、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
 - b. Oracle<Oracle Home>ProcessManager というサービスを選択し、「停止」をクリックしてサービスを停止します。
 - c. Oracle<Oracle Home>ASControl というサービスを選択し、「停止」をクリックしてサービスを停止します。
 - d. 「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。
2. 第 4.1 項「Oracle Universal Installer の起動」で説明する手順に従って、インストーラを起動します。

コンピュータにインストールされているすべての Oracle 製品が表示されます。製品は必要なだけ削除できます。ここで説明する内容は、Oracle Business Intelligence の削除にのみ適用されます。
3. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面で、「製品の削除」をクリックします。
4. 「インベントリ」画面のリストから、Oracle Business Intelligence 10g 10.1.2.0.2 が含まれる Oracle ホームを選択します。

製品名の前にプラス記号 (+) またはマイナス記号 (-) がある場合は、下位のコンポーネントやファイルを展開または縮小できます。

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを個別に削除することはできません。1 つのコンポーネントを選択した場合にも、Oracle Business Intelligence のすべてのコンポーネントが削除されます。
5. 「製品情報」ボックスに表示されている Oracle ホームへのフルパスをメモしてください。この情報は、インストーラが完了してから、ファイルやフォルダを手動で削除する場合に必要になります。
6. 準備ができたなら「削除」をクリックします。
7. 「確認」画面で、削除対象として選択した製品を確認し、「はい」をクリックすると、削除処理が開始されます。

選択内容を変更する場合は、「いいえ」をクリックして「インベントリ」画面に戻ります。

「削除」進行状況バーが表示され、削除処理を監視できます。削除を中断する場合は「取消」をクリックします。削除処理の中断を確認するメッセージが表示されたときは「はい」をクリックします。
8. 「削除時のインプット」ダイアログ・ボックスが表示され、保護コマンドラインの値の入力を要求された場合は、「OK」をクリックして続行します。

削除が完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。
9. 「閉じる」をクリックしてこの画面を終了し、「ようこそ」画面に戻ります。
10. 「ようこそ」画面で「取消」をクリックしてインストーラを終了します。インストーラを終了する確認画面が表示されたときは「はい」をクリックします。

注意： この時点で、Oracle Business Intelligence に関連付けられているファイルは、まだ Oracle ホーム・ディレクトリに存在しています。Oracle Business Intelligence が他の製品（Oracle Business Intelligence Tools など）と Oracle ホーム・ディレクトリを共有している場合は、その Oracle ホーム・ディレクトリから他のファイルまたはディレクトリを削除しないことをお薦めします。Oracle Business Intelligence が他の製品と Oracle ホーム・ディレクトリを共有していない場合は、Oracle ホーム・ディレクトリ全体を削除できます。

11. (オプション) Windows エクスプローラを使用して前の手順でメモした場所にある Oracle ホームに移動し、残っているファイルやフォルダを削除します。

12. コンピュータを再起動します。

これで Oracle Business Intelligence が削除されました。

5.2 Oracle Business Intelligence の再インストール

すでにインストールされているコンポーネントは上書きされません。Oracle Business Intelligence を完全に再インストールする場合は、[第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)で説明する手順に従って製品を完全に削除した後に、[第 4 章「Oracle Business Intelligence のインストール」](#)で説明する手順に従って製品をインストールする必要があります。

A

トラブルシューティング

この付録では、インストールでエラーまたは問題が発生した場合に使用する参照情報について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 第 A.1 項「始める前に」
- 第 A.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」
- 第 A.3 項「Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用」

A.1 始める前に

Oracle Business Intelligence のインストール中に発生した問題を解決する前に、次の説明をお読みください。

- 第 A.1.1 項「ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認」
- 第 A.1.2 項「リリース・ノートの確認」

A.1.1 ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認

最初に、Oracle Business Intelligence のハードウェアとソフトウェアの要件、およびインストール前の作業を確認します。

- 使用しているコンピュータが、第 2.1 項「ハードウェア要件」で指定されているハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- 使用中のオペレーティング・システム環境が Oracle Business Intelligence に対応していることを確認します。対応しているオペレーティング環境の一覧は、第 2.2 項「ソフトウェア要件」を参照してください。
- 第 1.3 項「インストール前の作業」の冒頭で指定されている、製品レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。
- インストールする各コンポーネントについて、コンポーネント・レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。これらの要件については、第 1.3.4 項「コンポーネントに固有なインストール前の作業」を参照してください。

A.1.2 リリース・ノートの確認

インストールの前に Oracle Business Intelligence のリリース・ノートをお読みください。Oracle Business Intelligence のリリース・ノートは、次の場所から入手できます。

- Oracle Business Intelligence CD-ROM（詳細は、第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照）
- OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>)

A.2 インストールに関するトラブルシューティング

Oracle Business Intelligence のインストール中にエラーが発生した場合は、次の手順に従います。

- インストーラを終了しないでください。インストーラを実行したままにしておくと、インストール・ログ・ファイルを簡単に検索できます。
- 入力の誤り：インストール画面のいずれかで誤った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を修正してからインストールを続行します。
- コピーのエラー：ファイルのコピーまたはリンク中にエラーが報告された場合は、次の手順に従います。
 1. エラーの内容をメモし、インストール・ログを参照して原因を調べます。インストール・ログは、インベントリ・ディレクトリのサブディレクトリ `/logs` にあり、ファイル名は次のとおりです。
 - `installActions timestamp.log`
 - `oraInstall timestamp.err`
 - `oraInstall timestamp.out`

文字列 `timestamp` は、インストールの開始時にファイル名に付加される値です。`timestamp` の形式は、`yyyy-mm-dd_hh-mm-ss[AM|PM]` です。それぞれの内容は次のとおりです。

- `yyyy` は、2004 のように現在の年を表します。
- `mm` は、現在の月を表します。7 月の場合は 07 になります。
- `dd` は、現在の日付を表します。15 日の場合は 15 になります。
- `hh`、`mm` および `ss` はそれぞれ、インストールが開始された時間、分、秒を表します。
- `[AM/PM]` は、インストールが開始された時刻が午前 (AM) であるか午後 (PM) であるかを表します。

インベントリ・ディレクトリの場所は、使用しているコンピュータに Oracle 製品を最初にインストールしたときに指定されます。ディレクトリとその検索方法の詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。

2. [第 5 章「Oracle Business Intelligence の削除と再インストール」](#)に記載されている手順に従って、失敗したインストールを削除します。
3. エラーの原因となった問題を修正します。
4. Oracle Business Intelligence のインストールを再度開始します。

注意： 追加の言語サポートを提供するために、Oracle Business Intelligence のインストール後に不足フォントのインストールが必要な場合もあります。詳細は、[第 4.6.2 項「インストール後に必要な追加のフォントをインストール」](#)を参照してください。

A.3 Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用

Discoverer には多数の診断ツールが用意されています。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Windows プラットフォームに Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge によって、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを使用できるようになります。

この付録の内容は次のとおりです。

- [第 B.1 項「Java Access Bridge の概要」](#)
- [第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)

B.1 Java Access Bridge の概要

Java Access Bridge を使用すると、JAWS スクリーン・リーダーなどの障害支援技術によって、Windows プラットフォームで実行されている Java アプリケーションの読上げが可能になります。障害支援技術では、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Application Server Control など、Java ベースのインタフェースを読み上げることができます。

Oracle Business Intelligence のインストール・メディアには、Oracle Universal Installer がインストール時に使用する Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が含まれています。この JRE によって、インストール時に Java Access Bridge の使用が可能となります。インストール時に JRE 1.4.2 で使用する Java Access Bridge を設定するには、[第 B.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)を参照してください。

インストール後に Oracle Business Intelligence コンポーネントで使用する Java Access Bridge をインストールおよび構成するには、[第 B.2 項「インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定」](#)を参照してください。

B.2 インストール済の Oracle コンポーネントで使用する Java Access Bridge の設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成する方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [第 B.2.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)
- [第 B.2.2 項「Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成」](#)

B.2.1 Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge バージョン 1.0.4 は、Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD からインストールできます。また、次のサイトから zip ファイルをダウンロードして Java Access Bridge バージョン 1.2 をインストールできます。

<http://java.sun.com/products/accessbridge/>

インストール手順およびその他の情報は、Sun 社の Web サイトにある Java Access Bridge のドキュメントを参照してください。

Java Access Bridge を Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD からインストールする手順は次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence インストール・メディアの、次のディレクトリに移動します。
`DRIVE_LETTER:\¥Disk1¥AccessBridge`
2. `accessbridge-1_0_4.jar` ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムにそのファイルを抽出します。
例：
`c:\¥AccessBridge-1_0_4`
3. [表 B-1](#) に示されている Java Access Bridge の各ファイルを、`windows_directory¥system32` ディレクトリにコピーします。

表 B-1 system32 サブディレクトリにコピーするファイル

コピーするファイル	コピー先
<code>¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JavaAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory¥system32</code>
<code>¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥WindowsAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory¥system32</code>

表 B-1 system32 サブディレクトリにコピーするファイル (続き)

コピーするファイル	コピー先
¥AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JAWTAccessBridge.dll	windows_directory¥system32

B.2.2 Java Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントの構成

Access Bridge を使用する Oracle コンポーネントは、インストールを完了した後で構成できます。このためには、システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH が、インストールした Java Access Bridge の各ファイルを指すように設定する必要があります。

B.2.2.1 Windows Server 2003 の場合の構成

Windows 2003 で Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」 → 「システム」 を選択し、Windows システムのコントロール・パネルを表示します。
2. 「詳細設定」 タブを選択します。
3. 「環境変数」 をクリックします。
4. 「システム環境変数」 リストの下にある「新規」をクリックして、「新しいシステム変数」ダイアログを表示します。
5. 「変数名」 フィールドに、「ORACLE_OEM_CLASSPATH」と入力します。
6. 「変数値」 フィールドに、jaccess.jar および access-bridge.jar へのフルパスを入力します。

2つのパスを区切るにはセミコロンを使用します。引用符やスペースは使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルトの場所にインストールされている場合、設定は次のようになります。

```
d:¥oraclehome1¥bihome1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥jaccess.jar;d:¥oraclehome1¥bihome1¥jre¥1.4.2¥lib¥ext¥access-bridge.jar
```

7. 「OK」 をクリックします。

非対話型インストールと サイレント・インストール

この付録では、Oracle Business Intelligence の非対話型インストールとサイレント・インストールについて説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 第 C.1 項「非対話型インストール」
- 第 C.2 項「サイレント・インストール」
- 第 C.3 項「インストール前」
- 第 C.4 項「レスポンス・ファイルの作成」
- 第 C.5 項「インストールの開始」
- 第 C.6 項「インストール後」
- 第 C.7 項「サイレント・モードを使用した削除」

C.1 非対話型インストール

Oracle Business Intelligence の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラに指定するインストール設定を含むテキスト・ファイルです。

インストーラは、このレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、一部またはすべてのインストーラ・ユーザー・プロンプトに応答します。画面表示があり、レスポンス・ファイルがすべてのインストーラ・プロンプトに回答していない場合は、インストール中に情報の入力が必要な場合もあります。

初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、レジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、第 C.3 項「インストール前」を参照）。

インストール時に特定の画面を監視する場合は、Oracle Business Intelligence の非対話型インストーラを使用します。

また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、非対話型インストールを使用できます。

C.2 サイレント・インストール

Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルはテキスト・ファイルです。

インストーラは、このレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、すべてのインストーラ・プロンプトに回答します。レスポンス・ファイルには、すべてのインストーラ・プロンプトに対する応答を格納します。サイレント・インストールには、画面の表示がありません。

初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイル作成の詳細は、第 C.3 項「インストール前」を参照してください。Oracle Business Intelligence をインストールした後は、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトによって環境変数の設定が検出され、ローカルの `bin` ディレクトリへのフルパスが入力可能になります。

Windows 上に初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、レジストリ・キーを作成する必要があります（詳細は、第 C.3 項「インストール前」を参照）。

複数のコンピュータに類似したインストールが存在する場合は、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールを使用してください。また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、サイレント・インストールを使用してください。サイレント・インストールでは画面表示やユーザーによる入力がないため、Oracle Business Intelligence のインストールを監視する必要はありません。

C.3 インストール前

使用しているコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールしていない場合は、次のレジストリ・キー値を作成する必要があります。

- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / em_loc = <ORACLE_HOME>`
- `HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / inst_loc = OUI_Inventory_Location¥Inventory`

`ORACLE_HOME` には、インストール先のフルパスを指定します。

`OUI_Inventory_Location` には、Oracle Universal Installer ファイルの場所を指定します。次に例を示します。

```
C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory.
```

C.4 レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型インストールの前に、インストール・パックの Disk 1 にあるレスポンス・ファイルのテンプレートを使用して、実行するインストール固有の情報を提供する必要があります。

Oracle Business Intelligence CD-ROM の /Disk1/stage/Response ディレクトリにある、レスポンス・ファイルのテンプレート

oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp を開き、テキスト・エディタを使用して変更します。

注意： この oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp ファイルは、my_responses.rsp など、異なるファイル名で保存すると、インストールのレスポンス・ファイルとして使用することもできます。

レスポンス・ファイルのパラメータの定義は、レスポンス・ファイル自体に記述されています。

レスポンス・ファイルでは、次の変数に値を指定する必要があります。

- COMPONENT_LANGUAGES
- FROM_LOCATION
- LOCATION_FOR_DISK1
- LOCATION_FOR_DISK2
- ORACLE_HOME
- ORACLE_HOME_NAME
- oracle.iappserver.instance:szl_InstanceInformation

次の点に注意してください。

- レスポンス・ファイルを適切に構成しないでサイレント・インストールを試みると、インストールは失敗します。
- ブール型パラメータには、true または false のどちらかを指定することをお勧めします。

C.4.1 レスポンス・ファイルの例

次に、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールで使用するレスポンス・ファイルの抜粋を示します。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME="oracleqa"
FROM_LOCATION="/home/BI_1012_Install/Disk1/stage/products.xml"
ORACLE_HOME="/home/BI_1012"
ORACLE_HOME_NAME="BI_1012"
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=false
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
```

```
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=false
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.business.intelligence.as", "10.1.2.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.business.intelligence.as", "10.1.2.0.0"}
DEPENDENCY_LIST={"oracle.java.j2ee.core:10.1.2.0.0"}
COMPONENT_LANGUAGES={"en", "ko"}
```

C.5 インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、インストーラの起動時に、使用するレスポンス・ファイルの場所をパラメータとして指定します。

非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setenv DISPLAY ias_hostname:0.0
prompt> ./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

Windows で非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\¥Installer¥Disk1> setup.exe -responseFile
¥Disk1¥stage¥response¥oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

サイレント・インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> ./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

Windows で (パラメータ `-silent` を使用して) サイレント・インストールを実行するには、次のように入力します。

```
prompt> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

たとえば、Windows では次のようになります。

```
D:\¥Installer¥Disk1> setup.exe -silent -responseFile
¥Disk1¥stage¥response¥oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp
```

C.6 インストール後

非対話型インストールとサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは `silentInstall.log` ファイルが作成されます。これらのログ・ファイルは、インストール時に `oraInventory¥Logs` ディレクトリ内に作成されます。

インストールに成功すると、`silentInstall<time_stamp>.log` ファイルに次の行が記録されます。

```
The installation of Oracle Business Intelligence 10g was successful.
```

C.7 サイレント・モードを使用した削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルに、サイレント・モードによる削除のパラメータを追加すると、サイレント・モードを使用して **Oracle Business Intelligence** を削除できます。インストール用のレスポンス・ファイルに次のパラメータを追加します。

```
REMOVE_HOMES="{<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

サイレント・モードを使用した削除を実行するには、コマンドの入力時に、パラメータ `-deinstall` を次のように使用します。

```
E:¥> setup.exe -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラによって、デフォルトのポート番号のセットからポート番号がコンポーネントに割り当てられます。この付録には、これらのポート番号のリストが記載されています。

異なるポート番号のセットを使用する場合は、`staticports.ini` というファイルを作成する必要があり、このファイルに使用するポート番号を記述します。詳細は、[第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」](#)を参照してください。

D.1 デフォルトのポート番号を割り当てる方法

インストーラによって、デフォルトのポート番号が、次の方法で各コンポーネントに割り当てられます。

1. デフォルトのポート番号が使用中かどうかを確認されます。使用中でなければ、そのデフォルトのポート番号がコンポーネントに割り当てられます。
2. デフォルトのポート番号が、Oracle 製品または実行中のアプリケーションによって、すでに使用されている場合は、ポート番号の範囲で最も小さいポート番号が試されます。利用可能なポート番号が見つかるまで、その範囲にあるポート番号が試されます。

D.2 デフォルトのポート番号

表 D-1 に、コンポーネントに対するデフォルトのポート番号を示します。最後の列の「staticports.ini での名前」は、staticports.ini ファイルに記載されるコンポーネント名を示しています。この名前を使用すると、デフォルトのポート番号を書き換えることが可能になります。詳細は、第 3.6.4 項「カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能)」を参照してください。

表 D-1 デフォルトのポート番号と範囲 (コンポーネントごとにグループ化)

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)			
Oracle Notification Server のリクエスト・ポート	6003	6003 - 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle Notification Server のローカル・ポート	6100	6100 - 6199	Oracle Notification Server Local port
Oracle Notification Server のリモート・ポート	6200	6200 - 6299	Oracle Notification Server Remote port
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)			
OC4J AJP	3301	3301 - 3400	staticports.ini では設定不可。
OC4J RMI	3201	3201 - 3300	staticports.ini では設定不可。
JMS	3701	3701 - 3800	staticports.ini では設定不可。
IIOP	3401	3401 - 3500	staticports.ini では設定不可。
IIOPS1	3501	3501 - 3600	staticports.ini では設定不可。
IIOPS2	3601	3601 - 3700	staticports.ini では設定不可。
OracleBI Discoverer			
OracleBI Discoverer	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
OracleAS Forms Services			
OracleAS Forms Services	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
Oracle HTTP Server			
Oracle HTTP Server Listener (OracleAS Web Cache は構成しない)	中間層 : 80 Infrastructure: 7777	7777 - 7877	Oracle HTTP Server Listen port
Oracle HTTP Server Listener (SSL)	中間層 : 443 Infrastructure: 4443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port

表 D-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネントごとにグループ化）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle HTTP Server Listener（非 SSL、OracleAS Web Cache は構成する）	中間層 : 80 Infrastructure: 7777	7777 - 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server Listener（SSL、OracleAS Web Cache は構成する）	中間層 : 443 Infrastructure: 4443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server SSL port
Java Object Cache	7000	7000 - 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 - 7199	DCM Java Object Cache port
DCM Discovery	7100	7100-7199	DCM Discovery port
SOAP サーバー	9998	9998 - 9999	staticports.ini では設定不可。
Port Tunneling	7501	7501 - 7599	staticports.ini では設定不可。
Oracle HTTP Server 診断ポート	7200	7200 - 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
OracleAS Portal			
OracleAS Portal	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
OracleAS Single Sign-On			
OracleAS Single Sign-On	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
OracleAS Reports Services			
SQL*Net（6i の下位互換性の目的で維持）	14040	14040 - 14049	Reports Services SQL*Net port
Discovery Service	14021	14021 - 14030	Reports Services discoveryService port
Bridge	14011	14011 - 14020	Reports Services bridge port
OracleAS Reports Services Visigenics CORBA	14000	14000 - 14010	staticports.ini では設定不可。
OracleAS Web Cache			
OracleAS Web Cache - HTTP Listener	80	80; 7777 - 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP Listener (SSL)	8250	8250 - 8350	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache 管理	9400	9400 - 9499	Web Cache Administration port
OracleAS Web Cache の無効化	9401	9400 - 9499	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache Statistics	9402	9400 - 9499	Web Cache Statistics port
OracleAS Wireless			
OracleAS Wireless	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control			
Application Server Control	1156	1156; 1810 - 1829	Application Server Control port
Oracle Management Agent	1157	1157; 1830 - 1849	staticports.ini では設定不可。
Application Server Control - RMI	1850	1850 - 1869	Application Server Control RMI port

表 D-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネントごとにグループ化）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Application Server Control - SSL	1810	1810 - 1829	SSL 用に Application Server Control を構成した場合、このポート番号はインストール後に割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
Enterprise Manager コンソールの HTTP ポート (orcl)	5500		staticports.ini では設定不可。
Enterprise Manager エージェントのポート (orcl)	1831		staticports.ini では設定不可。
ログ・ローダー	44000	44000 - 44099	Log Loader port
Oracle Internet Directory			
Oracle Internet Directory	389	13060 - 13129	Oracle Internet Directory port
Oracle Internet Directory (SSL)	636	13130 - 13199	Oracle Internet Directory (SSL) port
OracleAS Certificate Authority (OCA)			
Server Authentication Virtual Host	6600	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port
Mutual Authentication Virtual Host	6601	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port

索引

数字

256 色要件, 3-6

A

Administrators グループ, 3-14

B

Business Intelligence

コンポーネントの概要, 1-2

C

CD-ROM

ハード・ドライブへのコピー, 3-21

CPU 要件, 3-4

D

Discoverer Plus

概要, 1-2

Discoverer Plus OLAP

OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE の設定, 2-4

Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット

概要, 1-3

Discoverer Viewer

概要, 1-3

DVD

ハード・ドライブへのコピー, 3-21

H

hosts ファイル, 3-16

httpd.conf ファイル, 3-13

I

installActions.log ファイル, C-4

IP

複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール, 3-17

要件, 3-4

J

Java Access Bridge

インストール, B-2

インストール時の障害支援技術の使用, 1-5

インストール済の Oracle コンポーネントで使用する
ための設定, B-2

概要, B-2

構成, B-3

使用する Oracle コンポーネントの構成, B-3

O

OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE の設定, 2-4

Oracle Business Intelligence

インストール, 4-3

再インストール, 5-3

削除, 5-2

Oracle Business Intelligence の再インストール, 5-3

Oracle Business Intelligence の削除, 5-2

Oracle HTTP Server

静的ポートの構成, 3-13

Oracle Universal Installer

前提条件チェック, 3-24

ORACLE_HOME 環境変数, 3-15

ORACLE_SID 環境変数, 3-15

OracleAS Web Cache

静的ポートの構成, 3-13

Oracle データベース

Oracle Business Intelligence のインストール, 1-4

Oracle ホーム

考慮事項, 1-3

P

PATH 環境変数, 3-15

portlist.ini ファイル, 3-12

R

RAM 要件, 3-5

S

setup.exe コマンド

-executeSysPrereqs パラメータ, 3-3

silentInstall.log, C-4

staticports.ini ファイル, 3-10

作成, 3-11
フォーマット, 3-11

T

TEMP 環境変数, 3-15
TEMP ディレクトリ, 3-15
必要な領域, 3-6
TNS_ADMIN 環境変数, 3-15
TNS 名, 4-6

W

Windows
インストーラの起動, 4-2
オペレーティング・システム要件, 2-3
Windows システム・ファイル (wsf.exe), 3-7
wsf.exe, 3-7

あ

アクセシビリティ・ソフトウェア、Java Access
Bridge, B-1
インストーラ
Windows での起動, 4-2
概要, 1-6
使用するディレクトリ, 1-6
前提条件チェック, 1-7
インストール
Java Access Bridge, B-2
Oracle Business Intelligence, 4-3
インストール後の作業, 4-14
インストール後の作業, 4-5
コンポーネント固有, 4-9
インストールに関するトラブルシューティング, A-2
インストール前の作業
Oracle Business Intelligence, 1-4
コンポーネント固有, 1-5
エフェメラル・ポート, 3-8
オペレーティング・システムのバージョン, 3-4
オペレーティング・システム・ユーザー, 3-14
Administrators グループ, 3-14
オペレーティング・システム要件
Windows, 2-3
概要, 2-2

か

カスタム・ポート
「静的ポート」を参照
仮想メモリー (ページファイルのサイズ) 要件, 3-6
環境変数, 3-15
ORACLE_HOME, 3-15
ORACLE_SID, 3-15
PATH, 3-15
TEMP, 3-15
TNS_ADMIN, 3-15
設定, 3-15
グループ (オペレーティング・システム)
Administrators グループ, 3-14
言語サポート, 4-13, A-3
コンポーネント
カスタム・ポート番号を割り当てる方法, 3-10

デフォルトのポート番号, D-1
コンポーネント固有のインストール後の作業, 4-9
コンポーネントの起動, 4-10

さ

サイレント・インストール, C-2
障害支援技術
Java Access Bridge (インストール時), 1-5
情報
インストール時に必要, 1-6
静的ポート, 3-10
Oracle HTTP Server, 3-13, 3-14
OracleAS Web Cache, 3-13
機能しない場合, 3-12
前提条件チェック, 3-24
ソフトウェア要件
Oracle Business Intelligence のその他の要件, 2-5

た

チェック
インストーラによる前提条件, 1-7
追加の言語サポート, 4-13, A-3
追加のフォント, 4-13, A-3
ディスク領域要件, 3-5
データベース要件
OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE の設定, 2-4
Oracle Business Intelligence, 2-3
デフォルトのポート番号, 3-10, D-1
トラブルシューティング
不足フォント, 4-13, A-3
ドキュメント
CD-ROM から表示, 4-12
インストールおよびアクセス, 4-12

な

ネットワーク関連トピック, 3-16
ハード・ドライブからのインストール, 3-21
マルチホーム・コンピュータへのインストール
, 3-17
リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインス
トール, 3-22
ネットワーク要件, 3-4

は

ハード・ドライブからのインストール, 3-21
ハードウェア要件
Oracle Business Intelligence, 2-2
Windows での最小要件, 2-2
ハード・ドライブへの CD-ROM/DVD のコピー, 3-21
非対話型インストール, C-1, C-2
インストール前, C-2
ログ・ファイル, C-4
ファイル・システムのタイプ要件, 3-5
フォント
Albany フォント, 4-13
インストール後のインストール, 4-13, A-3
不足フォントに関するトラブルシューティング
, 4-13, A-3
複数インストール

- 実行, 1-4
- ブラウザ要件, 3-6
 - Oracle Business Intelligence, 2-4
- プロセッサ・スピード, 3-4
- ページファイルのサイズ (仮想メモリー) 要件, 3-6
- ホスト名要件, 3-4
- ポート, 3-8
 - エフェメラル, 3-8
 - 静的ポート, 3-10
 - デフォルトのポート番号の使用, 3-10
 - デフォルトのポート番号のリスト, D-1
- ポート番号, 4-6

ま

- マルチディメンション分析
 - 準備, 4-7
- マルチホーム・コンピュータ、インストール, 3-17
- メモリー要件, 3-5
 - 削減, 3-3
 - 複数のインスタンス, 3-3
- モニター要件, 3-6

や

- ユーザー (オペレーティング・システム)
 - 「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照
- 要件
 - IP, 3-4
 - TEMP ディレクトリ領域, 3-6
 - 後でネットワークから切断するコンピュータ, 3-18
 - オペレーティング・システムのバージョン, 3-4
 - 環境変数, 3-15
 - ディスク領域, 3-5
 - ネットワーク, 3-4
 - ファイル・システムのタイプ, 3-5
 - ブラウザ, 3-6
 - プロセッサ・スピード, 3-4
 - ページファイルのサイズ (仮想メモリー), 3-3, 3-6
 - ホスト名, 3-4
 - マルチホーム・コンピュータ, 3-17
 - メモリー, 3-3, 3-5
 - モニター, 3-6

ら

- リモート・インストール, 3-22
- リリース・ノート, 1-4, 4-12
- リレーショナル分析
 - 準備, 4-9
- レスポンス・ファイル, C-2
 - 指定, C-4
- ログ・ファイル
 - 非対話型インストール, C-4
- ロケール
 - 設定, 1-5

